

第 5 9 集

研究紀要

あいさつ

三好教育会 会長 豊田 能久

—— 研究指定校研究 ——

- 自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成
～実践的な安全教育の取り組みを通して～

屋間小学校 教諭 久原 有里

- 生徒の意欲関心を高め、豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～

三好教育研究所 宮成万寿美（現 三野中学校）

—— 教育研究所研究員研究 ——

- 興味関心を高め、基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用

三好教育研究所 研究員 常村 淳

- 誰もが分かる、楽しい授業を目指して
～ I C T の活用と U D を取り入れた授業の工夫～

三好教育研究所 研究員 立花 志津

三好教育研究所
平成 3 0 年度

ご あ い さ つ

吹く風にだんだんと春の暖かさを感じるようになりました。年度末を迎えて、会員の先生方にはお忙しい日々をお過ごしのことと思います。日頃は三好教育会の振興のために、温かいご理解とご支援をいただいておりますことに心からお礼を申し上げます。

本教育会と三好教育研究所では、昨年度（平成29年度）より、研究主題を「変化する社会の中で、心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成」と新たに設定し、5年間の研究に入りました。これからの社会は、人工知能の進化と情報化やグローバル化により、予測が困難な時代になるといわれています。三好地域においてもその変化の波は多少なりともやってくるのが予測されます。子どもたちには、社会の変化に対応しながらたくましく生き抜いていく力が必要となります。しかし、これまでと同様にふるさとの自然や人々とのふれあいを大切にしながら豊かな心を育てていくことも忘れてはいけません。その上で、グローバル的に広い視野を持った子どもたちの育成をめざして、これから研究を続けていくことになります。

本年度は、平成30年8月23日の「三好教育研究発表会」において、昼間小学校と三好教育研究所に、これまでの研究の成果をご発表いただく予定にしておりましたが、台風20号の接近に伴い、残念ながら中止となりました。

○自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成

～実践的な安全教育の取り組みを通して～

昼間小学校 教諭 久原 有里

○生徒の意欲関心を高め、豊かな感性を育成する主体的な学びについて

～美術科におけるデジタル教材の作成と活用を通して～

三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

（現 三野中学校 教諭）

詳しい内容等については、このCDの中に入っておりますのでご覧ください。発表に向けて万全のご準備をいただいていた昼間小学校と三好教育研究所の先生方には、心よりお詫びを申し上げますとともに、これまでのご労苦に対しまして、心から敬意と感謝を申し上げます。

また、発表のあとに予定していた教育研究家の妹尾昌俊氏の「本気で進める学校の働き方改革～なぜ必要か、何からどう進めるか～」と題したご講演も中止となりました。私たち教職員にとって、今正に考えていかななくてはならない内容であり、楽しみにしていた方もたくさんいらっしゃったことと思います。重ねてお詫び申し上げます。

なお、この研究紀要は、各学校に1部ずつCD化して配布させていただくとともに三好教育研究所のホームページにも掲載をしています。ご活用いただければ幸いです。

終わりになりましたが、本研究紀要の発行にあたりまして、いろいろとご指導やご助言をいただきました先生方、研究協力校（園）並びに委嘱研究員の先生方、そして関係各位に心よりお礼を申し上げますとともに、会員の先生方の今後益々のご活躍をお祈りし、ごあいさついたします。

平成31年3月

三好教育会長 豊田 能久

目 次

あいさつ 三好教育会 会長 豊田 能久

—— 研究指定校研究 ——

- 自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成…………… 1
～実践的な安全教育の取り組みを通して～

昼間小学校 教諭 久原 有里

- 生徒の意欲関心を高め，豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて…………… 12
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～

三好教育研究所 宮成万寿美（現 三野中学校）

—— 教育研究所研究員研究 ——

- 興味関心を高め，基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用…………… 26
三好教育研究所 研究員 常村 淳

- 誰もが分かる，楽しい授業を目指して…………… 38
～ＩＣＴの活用とＵＤを取り入れた授業の工夫～

三好教育研究所 研究員 立花 志津

- 既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）…………… 49

研究主題

自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成 ～実践的な安全教育の取り組みを通して～

昼間小学校 教諭 久原 有里

1 はじめに

本校は、県道 12 号線の真横に位置し、通勤通学時は交通量が多く、道路横断の際には細心の注意を払う必要がある。朝の通学時間帯には、交通量の多い交差点等を中心に、地域の交通指導員、警察官、保護者、学校支援隊の方々等、たくさんの方に立哨をしていただき、園児・児童の登校を見守っていただいている。また不審者の出没も毎年数件認知されており、学校が察知したこともある。登下校時の児童の安全を確保することが学校教育目標を達成する前提となる。

本校児童は、明るく元気で活動的である。反面、きまりやルールを守れない時もある。自己解決できる場面でも他者に頼る児童や、主体的に行動することができず指示待ちの姿勢の児童もいる。自分の身に危機がせまった場合に、自らの判断で知り得る知識を生かし、行動しようとする力が十分に身につけているとはいいがたい。

昨年度は、県教育委員会が進める実践的な安全教育のモデル地域として東みよし町が委託を受け、本園・本校が実践することとなった。安全教育を通して、「自分の命は自分で守ろう」を合い言葉に主体的に行動する態度の育成を目指して、取り組みを進めた。

2 研究の目的

安全教育を通して、緊急時のみならず平素から自他の生命を尊重した主体的な行動ができるように、安全に関する資質・能力の育成を目指す。

3 研究の方法

本校の実践は大きく分けて次の 2 つである。

- ・防犯を含む生活上の安全に関する教育実践
- ・登下校時を含めた日常的な学校の安全を確保する体制の整備

一つ目の防犯を含む生活上の安全に関することでは、次の 7 つのことを実践した。

- ①防犯カメラを活用した不審者対応訓練や防犯教室
- ②地域の防犯上危険な箇所の再点検
- ③安全集会・防犯に関する講演会
- ④e 安全学習教材の活用
- ⑤安全マップの作成・配布
- ⑥地域の見守り活動や「子ども 110 番の家」の協力依頼
- ⑦園児・児童対象、保護者対象アンケート調査

二つ目の登下校時を含めた日常的な学校の安全を確保する体制の整備では、次の 5 つのことを実践した。

- ①防犯カメラ活用による園児・児童の横断歩道の渡り方や歩き方の実態把握

- ②地域の交通安全上危険箇所の再点検
- ③e 安全学習教材の活用
- ④安全マップ作成・配布
- ⑤園児・児童対象，保護者対象アンケート調査

4 実践

防犯面，交通安全面の2つの観点から取り組みを進めた。実践した時系列で具体的な取り組みについて報告する。

■防犯カメラの運用

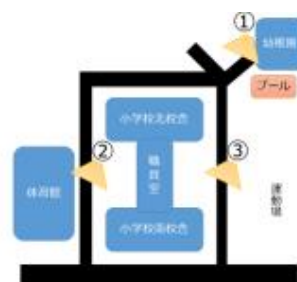
平成29年10月2日，防犯カメラの運用を開始した。幼稚園に1基，小学校に2基設置し，正門前の町道や校舎と体育館の間の町道が写るようになっている。防犯カメラの運用は東みよし町教育委員会の防犯カメラ運用規程に基づいている。幼稚園と小学校の職員室にモニター画面があり，園児・児童の登下校の様子や外での活動の様子が確認できる。小学校前の横断歩道が写るようになっており，横断歩道の渡り方の指導に生かすことができる。本校の構造上，児童は校舎から運動場へ行く時にも町道の横断歩道を渡る必要がある。休み時間に早く遊びたい一心で飛び出してしまい，自動車と接触しそうな事案もあった。カメラの映像を使い，全校児童に交通指導を行うこともあった。運用を始めて約2週間後に，本校児童が県道を横断中に自動車と接触する事故があり，防犯カメラが事故の検証材料となった。



モニター画面（小学校・幼稚園職員室）



設置箇所（体育館と校舎の間）



設置箇所略図

■アンケート調査

10月中旬，取り組み事前の意識調査として，園児・児童を対象にアンケートを実施した。防犯編・交通安全編各9問ずつで，回答は選択肢を設けて，答えやすいようにした。アンケート項目は次の通りである。（表1 児童向けアンケート）

アンケートの結果を校内で分析し，意識の低かった内容を繰り返し指導するなどの重点指導についての共通理解を図り，日常の安全指導に生かした。

11月上旬には，保護者対象のアンケートも実施した。主に，通学路及び地域の危険箇所について質問した。このアンケート結果は安全マップ作成時に保護者の意見として取り入れた。（表2 保護者向けアンケート）

12月中旬には，事後のアンケートを実施し，園児・児童の意識の変容を検証した。

■一斉下校による通学路点検

10月19日，一斉下校による通学路点検を実施した。7つのグループに分かれて下校し，交通安

全上危険な箇所，防犯上危険な箇所を確認した。危険が確認された場所については各児童が地図に印を入れていった。また，「子ども 110 番の家」を見つけて，いざという時に助けを求める家ということを繰り返し確認した。児童にとっては，普段何気なく通っている道でも，様々な危険があることを改めて知る機会となった。



表 1 児童向けアンケート

【防犯(ぼうはん)編(へん)】

①友達(ともだち)の家(いえ)に行(い)く途中(とちゅう)，知(し)らな人(ひと)に声(こゑ)をかけられたら，どうしますか。

- ア あいさつして，そのまま通(とお)り通(す)ぎる。
 イ あいさつして，立(た)ち止(ど)まる。
 ウ 話(わ)はなしを聞(き)くために，近(ちか)づく。
 エ 走(はし)って逃(に)げる。
 オ その他(た) ()

②知(し)らな人(ひと)とは，どんな人(ひと)ですか。

- ア 顔(かお)は知(し)っているが，名(な)前(まえ)は知(し)らない人(ひと)。
 イ お家(うち)の人(ひと)は知(し)っているが，自(じ)分(ぶん)は知(し)らない人(ひと)。
 ウ 顔(かお)も名(な)前(まえ)も知(し)らない，今(いま)まで見(み)たことのない人(ひと)。
 エ 顔(かお)も名(な)前(まえ)も知(し)っているが，あいさつをしたことがない人(ひと)。
 オ その他(た) ()

③一人(ひとり)で留守番(るすばん)をしていたら，知(し)らな人(ひと)が呼(よ)び鈴(すず)を鳴(な)らしました。どうしますか。

- ア いないふりして，出(で)ていかない。
 イ ドアを開(あ)けず，相(あ)いでの話(わ)はなしを聞(き)く。
 ウ ドアを開(あ)けて，相(あ)いでの話(わ)はなしを聞(き)く。
 エ ドアを開(あ)けて，家(いえ)の中(なか)へ入(い)り込んでもらう。
 オ その他(た) ()

④「子(こ)ども110番(ばん)の家(いえ)」とは，どんな家(いえ)ですか。

- ア 子(こ)どもがおまわりさんになって子(こ)どもを助(たす)けられる家(いえ)。
 イ 子(こ)どもが道(みち)はたでケガ(けが)をしたとき助(たす)けてくれる家(いえ)。
 ウ 子(こ)どもが知(し)らない人(ひと)に追(お)いかれたとき助(たす)けを求(もと)める家(いえ)。
 エ 子(こ)どもが電話(でんわ)でんわで110番(ばん)を押(お)したとき連絡(れんらく)がとれる家(いえ)。
 オ その他(た) ()

⑤防犯(ぼうはん)カメラは，私(わたし)たちの命(いのち)を守(まも)ってれていると思(おも)いますか。

- ア とてもそう思(おも)う。
 イ 少し(すこ)し思(おも)う。
 ウ あまりそう思(おも)わない。
 エ まったくそう思(おも)わない。

⑥私(わたし)たちの命(いのち)を守(まも)ってくれる人(ひと)とは，どんな人(ひと)ですか。(いづ○してもよい)

- ア おまわりさん
 イ 近(きん)所(じょ)の人(ひと)
 ウ 地(ち)域(いき)見(み)守(まも)り隊(たい)の人(ひと)
 エ お家(うち)の人(ひと)
 オ 先生(せんせい)
 カ 自(じ)分(ぶん)
 キ その他(た) ()

⑦登(のぼ)り下(くだ)り時(とき)路(ろ)や道(みち)を行(い)く途中(とちゅう)などで，不審者(ふしんしゃ)らしき人(ひと)を見(み)かけたことがありますか。

- ア よくある。
 イ 数回(すうかい)ある。
 ウ 1回(いっかい)だけある。
 エ まったくない。

⑧不審者(ふしんしゃ)が出(で)て，そんな危険(けんけん)な場所(ばしょ)はどこだと思(おも)いますか。(いづ○してもよい)

- ア 家(いえ)のうら
 イ 学(が)校(こう)のうら
 ウ 広(ひろ)い道(みち)
 エ 細(ほそ)い道(みち)
 オ 明(あ)かりの道(みち)
 カ 暗(く)い道(みち)
 キ 空(あ)き家(か)
 ク お店(みせ)
 ケ その他(た) ()

⑨「い・か・の・お・す・し」について知(し)っていますか。

- ア よく知(し)っている。
 イ 少し知(し)っている。
 ウ あまり知(し)らない。
 エ まったく知(し)らない。

【交通安全(こうつうあんぜん)編(へん)】

①校門(がうもん)から運動場(うんどうじょう)へ行(い)く交(か)差(さ)点(てん)横断(おうだん)歩道(ほどう)のわたり方(かた)で正(ただ)しいものを選(えら)びまう。

- ア さっさと走(はし)ってわたる。
 イ 手(て)をのけて，走(はし)ってわたる。
 ウ 1度(いちど)止(ど)まって，歩(ある)きながら左(ひだり)右(みぎ)を確認(かくにん)してわたる。
 エ 1度(いちど)止(ど)まって，左(ひだり)右(みぎ)を確認(かくにん)し，手(て)をのけてわたる。
 オ その他(た) ()

②信号(しんごう)がある横断(おうだん)歩道(ほどう)をわたります。信号(しんごう)が青(あお)になったら，どうしますか。

- ア 急(いそ)いでわたる。
 イ 確認(かくにん)はしないが，ゆっ(ゆ)くり歩(あ)いてわたる。
 ウ 車(くるま)が来(き)ていないか，確認(かくにん)しながらわたる。
 エ 車(くるま)が来(き)ていないか，左(ひだり)右(みぎ)を確認(かくにん)してから歩(ある)きはじめる。
 オ その他(た) ()

③雨(あめ)がふっているで傘(かさ)をさしています。道路(どうろ)を歩(あ)くときどきどきどこに気(き)をつけますか。

- ア 雨(あめ)にぬれてはいけなないので，顔(かお)の前(まえ)まで傘(かさ)をしゃくりさす。
 イ 車(くるま)の水(みず)しぶきでぬれないよう，車(くるま)が走(はし)る方(ほう)向(こう)に傘(かさ)を向(む)ける。
 ウ 少し(すこ)しぬれるかもしれないが，前(まえ)が見(み)えるよう傘(かさ)をさす。
 エ 車(くるま)が来(き)たときどきどきでも危(あふ)ないで，傘(かさ)をたたむ。
 オ その他(た) ()

④自転車(じてんしゃ)に乗(の)るときは，ヘルメットをかぶっていますか。

- ア 必(かならず)ずかぶっている。
 イ ほとんどかぶっている。
 ウ あまりかぶらない。
 エ かぶったことがない。

⑤自転車(じてんしゃ)に乗(の)るときどきどきどこに注意(ちゅうい)していますか。(いづ○してもよい)

- ア 縦(たて)一列(いっぺん)になつて走(はし)る
 イ 道路(どうろ)の端(はし)を通(とお)る
 ウ 荷物(にもの)を積(つ)み通(す)ぎない
 エ 自(じ)分(ぶん)の体(からだ)に合(あ)った自転車(じてんしゃ)に乗(の)る
 オ スピードを出(だし)すぎない
 カ 歩(ある)く人(ひと)がいたら，道(みち)をゆずる
 キ こわれたところがなく乗(の)る前(まえ)に確認(かくにん)する
 ク その他(た) ()

⑥通学(つうがく)路(ろ)はどのように決(き)めて通(とお)っていますか。

- ア お家(うち)の人(ひと)と一緒(いっしょ)に通(とお)って確認(かくにん)したところがある道(みち)を通(とお)っている。
 イ お家(うち)の人(ひと)に言(い)われた道(みち)を通(とお)っている。
 ウ 家(いえ)から学(が)校(こう)まで1番(ばん)近(きん)道(みち)を自(じ)分(ぶん)で決(き)めて通(とお)っている。
 エ 毎(まい)日(にち)違(ちが)う道(みち)をその日(ひ)の気(き)分(ぶん)で通(とお)っている。
 オ その他(た) ()

⑦通学(つうがく)路(ろ)の危険(けんけん)な場所(ばしょ)についてお家(うち)の人(ひと)と話(わ)はなし合(あ)ったことがありますか。

- ア よく話(わ)はなし合(あ)っている。
 イ ときどき話(わ)はなし合(あ)っている。
 ウ 1度(いちど)話(わ)はなし合(あ)ったことがある。
 エ まったく話(わ)はなし合(あ)ったことがない。

⑧車(くるま)に乗(の)っているとき，シートベルトをしていますか。

- ア 毎(まい)日(にち)に。
 イ ときどき。
 ウ お家(うち)の人(ひと)に言(い)われて，何(なん)かしたことがある。
 エ 1度(いちど)したことがある。

⑨止(ど)まっている車(くるま)のそばを通(とお)るとき，どこに注意(ちゅうい)していますか。(いづ○してもよい)

- ア 車(くるま)の中(ちゅう)に人(ひと)が乗(の)っているか。(運転席(うんてんせき)以外(い)がよい)
 イ 運転席(うんてんせき)に人(ひと)が乗(の)っているか。
 ウ エンジンが回(まわ)っているか。
 エ 前(まえ)に動(うご)くかもしれないので，後(うしろ)を通(とお)る。
 オ 後(うしろ)に動(うご)くかもしれないので，前(まえ)を通(とお)る。
 カ 前(まえ)にも後(うしろ)にも動(うご)くかもしれないので，1度(いちど)止(ど)まってどこを通(とお)るか考(かんが)える。
 キ いきなりドアが開(ひら)くこともあるので，横(よこ)を通(とお)るときは少(すこ)し止(ど)ま(離(はな)れてゆっ(ゆ)くり通(とお)る。
 ク 何(なに)にも注意(ちゅうい)しないので，通(とお)りたところを通(とお)る。
 ケ その他(た) ()

表2 保護者向けアンケート

防犯・交通安全アンケート（保護者対象）
お子さんの学年に○をしてください。 幼・1年・2年・3年・4年・5年・6年
※質問の答えにあてはまる記号に○をしてください。
①お子さんはどのように決めた通学路を通っていますか。 ア 一緒に歩いて確認した道を通っている。 イ 地図や口頭で教えた道を通っている。 ウ お子さんが自分で決めた道を通っている。 エ どの道を通学路にしているか知らない。
②お子さんの通学路の危険箇所等について、ご家庭で話し合ったことはありますか。 ア よく話し合っている。 イ ときどき話し合っている。 ウ 1度話し合ったことがある。 エ まったく話し合ったことがない。
③お子さんの通学路や地域の道路で、お気づきの危険箇所等ありましたら、ご自由にお書きください。 防犯面、交通安全面、どちらの視点からでも構いません。お子さんの安全を守るためにご協力ください。 (例)・○○の前の四つ角は、一時停止をしない車が多いので、危ない。 ・□□の裏の道は、人气が少なく、外灯もないので、夜一人で通るのは避けたほうがよい。等

■不審者対応訓練・防犯教室

10月31日、防犯カメラを活用した不審者対応訓練を実施した。不審者を防犯カメラで発見するという流れの訓練にした。カメラに写った不審者の様子を確認し、関係諸機関への通報や各教室への指示を出した。避難訓練実施計画の一部抜粋したものを次に示す。

平成29年度 不審者侵入による避難訓練実施計画(抜粋)

1 目的

児童に危害があると予想される不審者等の侵入に際して、防犯カメラを利用し、教職員があわてず適切・迅速な判断、行動のもとに児童の安全を確保する。

2 日時

平成29年10月31日（火）午後1時45分～午後2時30分

3 訓練の内容

(1) 避難訓練及び防犯教室

来校者 三好警察署 生活安全課職員1名、不審者役をしてくださる警察官1名
昼間駐在所 警察官2名

(2) 想定の内容

平成29年10月31日午後1時45分、校門付近から不審者が侵入しようとする姿を防犯カメラがとらえ、職員室にいる職員が発見し、教頭が校門に行く。不審者に声をかけ、2年生担任がその様子に気付く。

(3) 伝達方法

防犯カメラを見た職員室職員（主事）は、校長、男性教諭2名に連絡をする。

2年生担任が緊急用の非常ベルを鳴らす。

職員室職員（主事）は、2年生へ連絡する。（非常ベルが鳴っていれば必要なし）

職員室から校内方法にて、全校児童職員へ指示をする。

2年生T2がいる場合は、職員室と1年生に電話連絡をする。

（校内放送が終わっている場合は必要なし）

4 避難（防護）の詳細

午後	担任・児童の行動	対応
1:45		・校門付近から侵入してきた不審者を<u>防犯カメラがとらえ</u>、職員室職員が発見。 （教頭・主事）
1:48	・2年生担任が外の様子に気が付き、緊急用非常ベルを鳴らす。 ・教室の鍵を閉めて、不審者から離れた場所で集まる。 ※T2がいる場合は、職員室と1年生へ電話連絡。 （放送が先あれば必要なし）	・初期対応：教頭が現場へ ・男性教諭2名へ連絡。（主事） ・男性教諭2名が合流。（主事は<u>状況注視</u>） ・押し問答中（教頭・男性教諭2名） ・<u>防犯カメラの様子を見て</u>、校長が放送、通報の指示を出す。 （校長不在の場合は、主事が判断） ・校内放送（主事） 「<u>訓練です。玄関付近でガス漏れが発生しました。教室で待機してください。</u>」
1:50	・放送を聞き、担任の指示にしたがって待機する。 （確保されるまで待つ） ・<u>教師は教室の鍵を閉め、入り口から離れた場所で待機する。その後、連絡があれば、指示にしたがって移動する。</u>	・110番通報訓練（主事） ※職員室職員が他にいる場合は、もう一人が通報する。 （緊急の場合は、携帯で通報することも想定） 【基本：不審者侵入を確認したら、職員室職員一人が放送、一人が110番通報、（避難する場合は避難場所）、その他は不審者対応】

1:51	【基本：不審者を発見したら児童の安全確保・避難の指示をし、非常ベルを鳴らす。】 不審者の動きに合わせて ①不審者が校舎の中に入った時 不審者から離れるように避難する。 ②不審者が校舎から離れている時 鍵を閉め、不審者から離れたところで集まる。 	※今回の訓練での不審者対応 教頭、男性教諭2名 (さすまたを持ち、不審者対応に当たる。できるだけ校舎に近づけない。) 男性教諭2名は教室の鍵を閉め、玄関へ移動。 ※今回の訓練での110番通報 主事が防犯カメラに映る不審者の特徴を通報する。(性別・人数・状況等) (今回は、実際には110番通報せず、シミュレーション。) <u>不審者対応の職員は不審者をできるだけ学校に近づけないようにし、押さえつける。</u> (防犯カメラに映る範囲) ・駐在所から警察官が駆けつける。 (警察官が不審者を取り押さえたら終了) 「訓練は終わりました。続いて防犯教室を行いますので体育館へ集まってください。集まる時は、おさない・はしらない・しゃべらない・もどらないをしっかりと守りましょう。体育館へ入った後も、指示があるまで静かに待ちましょう。」(主事)
------	--	---

訓練後の防犯教室では、警察の方より、児童に対して自分の身を守るための方法について教えていただいた。



■安全クラブ結成

10月中旬、4年生から6年生までの安全に関する活動に興味をもつ児童を募り、20名で安全クラブを結成した。防犯カメラの啓発プレート作成や安全集会の企画運営を行った。

安全マップ作成時には、全校児童や保護者が一斉下校時の通学路点検で調べた危険箇所に関するデータを整理してまとめた。



安全教育クイズの作成



「子ども 110 番の家」の確認

■安全集会・教育講演会

11月14日、オープンスクールでの安全集会では、安全クラブが中心となって通学路点検で調べた地域の危険箇所や「子ども 110 番の家」について発表した。児童自作の安全教育クイズも行い、意識の高揚を図った。危険箇所の写真を提示すると、児童は自分が通る道かなと興味津々であった。クイズは縦割り班で取り組んだので、高学年の子が低学年の子にアドバイスをしている場面が見られ、全校児童と一緒に学ぶよい機会となった。

ぼうはん こうつう あんぜん
**防犯・交通安全
クイズ**

※やるキッズ班のみんなで協力して、
答えをかんがえてね！

1.知らない人が「おもちゃを買ってあげるからおいで。」と話しかけてきました。どうしますか？

①ついていっておもちゃをかってもらう。
②「いいません」とはっきりことわる。
③すこしかんがえてみる。

2.遊びに行くとき、おうちの人に行くところとほかになにをつたえますか？

①かえる時間と ともだちのなまえ。
②かえる時間と なにをするか。
③ともだちのなまえ と なにをするか。

「自分の身を守ること」と題して、鳴門教育大学の阪根先生による講演も実施した。4年生から6年生までの児童と保護者が防犯についてのお話を伺った。徳島県の実状や具体的な事例を交えた子どもから大人までがわかりやすい、自分の身を守ることへつながる貴重なお話だった。

■e安全学習教材活用

11月末にe安全学習研修会に参加し、教材の活用について研修を受けた。今回活用したe安全学習教材とは、大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンターが開発した小学校児童を対象としたパソコンを使った防犯教育のためのe-learning教材である。このe安全学習教材を各学年で、朝や帰りの活動の時間などを利用して学習した。児童の発達段階や実態に応じて、内容を選択することができる。映像を見ながら、クイズ形式で学習できるので、児童も意欲的に学ぶことができた。



大阪教育大学学校危機メンタルサポートセンター提供のe-learningシステムの活用



園児・1年生を対象に防犯学習

■「子ども 110 番の家」への協力依頼

1 月から 2 月にかけて、「子ども 110 番の家」へ訪問し、協力依頼をした。これまで学校から積極的な関わりが少なく、プレートを設置している家や店舗が実際に機能しているか、はっきりしていなかった。昨年度より、PTAを中心に児童も参加し、訪問活動を行うことにした。地域・家庭・学校が連携し、地域の見守り活動を行っていく体制づくりを目指している。



■幼稚園不審者対応訓練

1 月 31 日、幼稚園の不審者対応訓練を実施した。小学校校舎と幼稚園園舎が離れていることもあり、小学校とは別に訓練を行った。幼稚園でも防犯カメラを活用した計画に変更し、園児がすばやく避難できるよう訓練した。今後は、小学校と幼稚園が合同の訓練ができるよう教育課程等の調整をしていく。



■成果報告会

1 月 28 日、学習発表会で本実践での取り組みについて成果報告会を行った。園児、全校児童、幼小の保護者、地域の方に、実践の内容やアンケート結果を報告した。

安全クラブの児童が安全マップを紹介し、全家庭 200 軒へ配布した。昨年度末までに、校区内の 800 軒のお宅に配布した。園児・児童の防犯学習の成果を通して、地域への啓発することができた。



■安全マップ作成・配布

昼間校区の交通安全注意地点、不審者注意地点、子ども 110 番の家を示した安全マップを作成した。一斉下校で児童が確認した危険箇所、保護者アンケートの意見等を取り入れた。

児童は、配布されたマップを見て、自分の家を 1 番に探していた。「家庭に持ち帰って、お家の人と一緒に危険箇所を確認しましょう。」と呼びかけた。

安全マップを活用して日常の安全指導を行い、継続的に安全マップが児童の目に触れるよう、また、家庭でも安全について話す機会を作ってもらえるよう、働きかけている。



作成した安全マップの表記の特徴を記す。

表面は、校区全域の地図である。ここに、「子ども 110 番の家」30 軒を載せた。

黄色の数字は、「子ども 110 番の家」、赤い星は、不審者注意地点、青い星は、交通安全注意地点を示している。

裏面は、校区を 3 つのエリアに分けて示した。

各エリア 3 地点は写真つきで、危険箇所について説明している。

5 実践研究の成果と課題

(1) 防犯を含む生活上の安全に関すること

成果については、アンケート調査より、声かけをされた時の対応や危険回避方法についての知識が向上し、目標にしていた 8 割以上の園児・児童が正しい知識を得たと考えられる。具体的には、事後調査で「知らない人に声をかけられたら、どうしますか。」という問いに、「あいさつをして通りすぎる」を選んだ園児・児童が 89%であった。また、「いかのおすしについて知っていますか」という問いに、「よく知っている」または「少し知っている」を選んだ園児・児童が 81%だった。

事前調査で、「命を守ってくれる人の認識」や「いかのおすしの知識」についての問いでは、園児や低学年児童の正答率が低かった。防犯教室や日常の安全指導の成果もあり、事後調査では正答率が上がった。

次のような課題も明らかになった。「子ども 110 番の家とは、どんな家ですか？」という問いに、「子どもが電話で 110 番を押したときに連絡がとれる家」を選んだ低学年児童が、事後調査にも 22%いた。「子ども 110 番の家」の役割についての認識が不十分であることがわかった。いざというときに助けを求められるよう、今後も繰り返し指導していく必要がある。「子ども 110 番の家」については、これまで学校からの積極的な関わりが少なく、実際に機能しているかはっきりしていなかったため、今後も訪問活動を継続し、学校・家庭・地域が連携し、見守り活動を行っていきたいと考えている。

(2) 登下校時を含めた日常的な学校の安全を確保する体制の整備

防犯カメラを活用することにより、園児・児童の登下校の様子を把握し、問題点や課題を明確にすることができた。校門前の横断歩道では、左右を確認する様子や手の上げ方をカメラで確認することができる。正しい渡り方ができていない園児・児童は、直接指導することによって改善が見られている。

アンケート調査より、正しい横断歩道の渡り方や自転車の正しい乗り方の知識が向上したことが明らかになった。具体的には、「校門から運動場へ行くときの横断歩道の渡り方で正しいものを選びましょう」という問いに、正しい回答の「一度止まって左右を確認し、手を挙げてわたる」を 81%の園児・児童が選ぶことができた。

通学路に関する問いで、通学路のことを話し合っている家庭が約 5 割と半数であった。登下校の道を問う質問では、日によって違う道を通るという回答もあり、通学路を必ず通るという認識が希薄であることが明らかになった。今後は、入園・入学時に学校が安全であると認めた通学路を必ず通るという指導を徹底し、保護者に向けても周知を図りたいと考えている。また、今回作成した安全マップが園児・児童の安全確保につながるものであるか、保護者や地域住民の意見も取り入れて、改善していく必要もあると考えている。

（３）全体を見通して

安全マップを作成し、地域全体に配布できたことは、今後も学校と地域が連携して安全教育に取り組んでいくことを考えると、大きな成果だと考えている。園児・児童の防犯学習の成果を通して、地域への啓発を図ることもできた。本校は、コミュニティスクール実践校でもあり、以前より地域の方に学校運営に携わっていただき、地域とともに歩む学校を目指している。本実践においても、地域の方にご協力をいただき、さらなる連携のきっかけとなった。

防犯カメラの設置は本校では初めてのことであった。実践委員会では、学校の防犯だけではなく、地域のプライバシー保護の観点や運用に関する基準を明確にすることの重要性を学ぶことができた。

通学路の安全点検を地域や保護者と一緒に進めることは数年ぶりのことで、学校だけでは知り得ない具体的な情報を提供してもらうことができた。今後も継続できるよう計画している。

6 考察

実践的な安全教育の取り組みを通して、安全安心な生活を送るため、自分の命は自分で守るためには、きまりやルールを守ることが大切であることを徹底して指導してきた。横断歩道の渡り方や自転車の乗り方などの安全に関わるだけでなく、学校や学級のきまりを守ることでお互いが気持ちよく安全に生活できることも併せて日々伝えてきた。チャイムの合図を守る、廊下は右側を歩くなど、子ども同士が声をかけ合って望ましい行動が増えつつある。

また、安全クラブを結成し、児童自らが主体的に活動できる場をつくり、学校全体や地域に呼びかけたことで、児童の安全に対する意識が高まった。安全クラブの児童は、主体的に集会の準備や運営、安全マップの作成等に関わり、自分たちにできることは何かを考えて、活動することができた。児童が発信・啓発することで、まわりの児童をはじめ、保護者や地域の方にもより思いが伝わったと考えている。

実践を通して、学校・家庭・地域が連携した安全教育を進めることの大切さを実感した。今後は、学校・家庭・地域が連携した安全教育の取り組みが他校へも広がるよう、モデル校として実践を継続していきたい。

研究主題 生徒の意欲関心を高め、豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて
～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～

三好教育研究所 宮成万寿美

1 はじめに

美術の楽しみをもっともっと子どもたちに伝えたい。そして、美術で学ぶことや美術でしか学べないことを通して自己肯定感を育てたい。そんな思いをもって、これまで美術教育に携わってきた。「きれい！」「おもしろそうだ！」「もっと見てみたい！」「つくってみたい！」と思えるような「わくわく感」のある作品との出会いを大切に、表現や鑑賞の活動を通して、自分のつくった作品を大切に飾ったり残しておいたりできるような“思いを込めたものづくり”や「この作品のここが好き」と言える“私のお気に入りの発見”をさせたいと思っている。

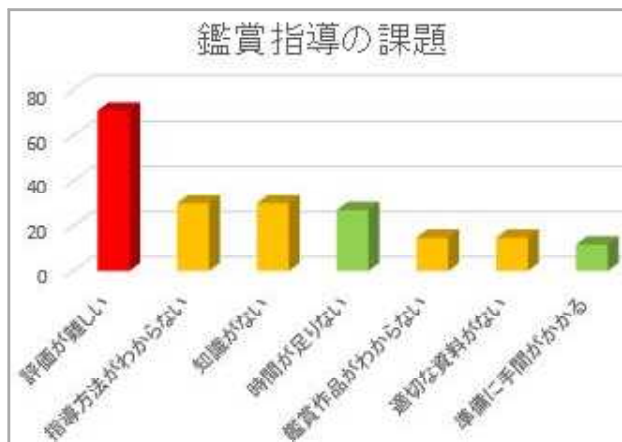
2 研究のねらい

美術科では、「表現や鑑賞の幅広い活動を通して、創造することの楽しさを感じながら、造形的な創造活動の基礎的能力（想像・発想・判断する力や表現する力）を伸ばすとともに、生活の中の造形や美術文化に関心をもち、美術を愛好する心情や豊かな感性を育成すること」を目指している。これまでも、「ひと」「もの」「こと」そして「自分」との関わりの中で「よさ」や「価値」を発見していくような主体的な学びや体験を重視して取り組んできたが、アクティブ・ラーニングの視点からも、更に生徒一人一人の感性や想像力が働くような「自分なりの見方や感じ方・批評」「自分らしい表現」を深める学習指導の改善・充実が求められている。そのためには、視覚だけでなく五感を十分に働かせながら形や色彩等の性質や感情・イメージ等を豊かに感じ取り表現すること（造形的な視点について実感的に理解できる学習）や、自分の思いや価値意識をもって作品に向かい合い他者と対話すること（意見を交わすことにより自己の確認ができる学習）が大切であると考えます。“豊かな鑑賞が表現を広げ、また多様な表現が鑑賞を深める”という「表現と鑑賞の関連」を根底に据えて、表現活動だけでなく、「積極的によく見る鑑賞」「自分の思いや考えを表す対話的な鑑賞」の充実を図り、生徒の意欲関心を高め豊かな感性や思考力を育てる主体的な学びのある授業を工夫したいと考えた。

三好地区小中学校の図画工作科・美術科担当の教員を対象に昨年度実施したアンケート調査の回答から、表現の指導に比べて鑑賞の指導への取り組みが全体的に消極的であることが分った。また、その理由として「指導方法がわからない」「知識がない」「鑑賞する作品がわからない」「適切な資料がない」「準備に手間がかかる」等の課題があげられた。（図1参照）

聞き取り調査の結果からも、「小学校では専門の教員が少なく研修の機会もあまり

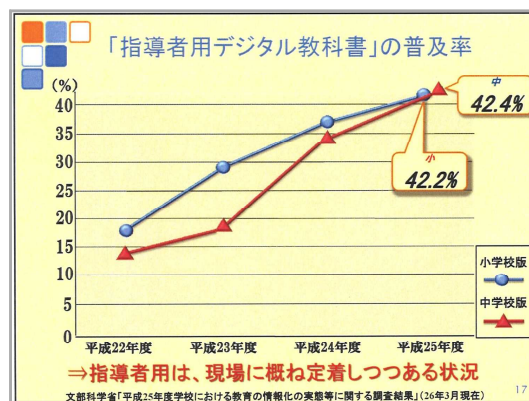
ないため、どのように指導すればよいかわからない」「中学校でも小規模校においては免許外の教員が担当しており指導が難しい」という実態が明らかになった。評価の困難さに対する



(図1)

「評価規準や評価方法」の工夫改善も大きな研究課題ではあるが、まずは鑑賞の実践が最重要課題であり、「題材の決定と鑑賞作品の選択」「授業展開や指導の方法」「鑑賞作品の資料・教材の準備」等に対する研究や検証が必要であると考えた。

また、今、児童生徒の学習意欲の向上のためにICTの活用が推進されている。様々なデジタル教材やデジタル教科書等が発行されているが、学校現場で普及が進んでいるのは、普通教室における授業で主に教師が使用する「指導者用デジタル教科書」である。（図2参照）これは一斉指導型授業スタイルをベースに開発されたもので、授業を分かりやすくサポートするための提示型教材である。「学習情報の共有化」「話し合い活動の活性化」「学習内容の焦点化や視覚化・音声化」等に



(図2)

において、児童生徒の興味関心を高めるとともに、理解を容易にし学習を深める（特に低位層の生徒の学力向上）という点で効果を発揮している。美術科のデジタル教科書については、表現領域では様々な表現技法や道具の使い方等を動画で確認できたり、鑑賞領域では作品の図版等が比較的豊富に収録されていたりと、その利用価値は高く、授業準備の効率化も図ることができる。しかし、残念ながら今現在三好地区においては、小中学校ともに国語等の5教科しかデジタル教科書は導入されておらず、ICTを有効に活用して学習指導ができているとは言い難い。

これらの実態や現状を踏まえ、美術科における「主体的な学び」のための一手段として、「提示型デジタル教材」（主にプレゼンテーションソフトによる）の作成・活用を試みた。デジタル教材ならではのメリットを考え、使用することにより生徒の意欲関心を高めるとともに、理解を助け、さらに思考力・発想力・判断力が深まるようなものが望ましい。表現・鑑賞の学習とともに、どのような力を身に付けさせたいのか、そのためにどの領域・題材でどのようなデジタル教材が必要であるのか、「育てたい資質・能力」や「デジタル教材の有効性」を明確にして教材を作成することが大切である。また、作成したデジタル教材をどの場面でどのように提示するのか、「授業での効果的な使い方やその位置付け」を工夫することも重要である。特に独立した鑑賞の授業では、どのような学習目標をもって、どのような題材で、どの作品や資料を鑑賞対象として使用するのか、「学習のねらいに合った題材や鑑賞作品の選択決定」に留意して鑑賞資料の充実を図りたいと考えた。そして、アクティブラーニングの視点も取り入れて、どのような鑑賞形態や学習活動で対話を広げたり学習を深めたりするのか、「生徒が主体となる授業展開や指導方法」を構想することが必要であると考え、本研究に取り組んだ。

〈研究仮説〉

表現や鑑賞の指導において「提示型デジタル教材」を活用することにより、生徒の関心意欲の向上や主体的な学習を図るとともに、造形要素の理解や対話を促進し、「見る力」「考える力」「表す力」等の美術の基礎的な能力や豊かな感性を育成することができるのではないかと考えた。

3 研究の内容と実践

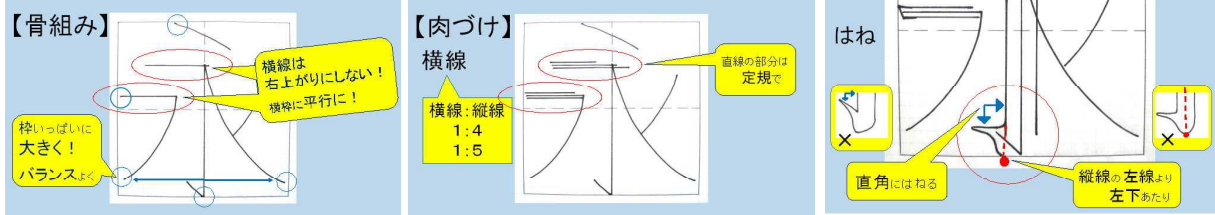
(1) 表現の活動における提示型デジタル教材の作成と活用について

表現のデジタル教材は、色の基本に始まり、明暗や陰影のとらえ方、水彩画の表現技法や遠近図法の描き方、木彫や陶芸の技法、彫刻刀等の道具の使い方等、絵画・彫刻・デザイン・工芸のどの領域においても多岐にわたる。特に技法や道具の使い方については、画像だけでなく音声説明の付いた動画等、視覚情報として非常に分かりやすいものが多い。見たい画面を静止させたり、同じ箇所を何度でも繰り返して見たりできることもその利点である。また、その活用は、授業中の説明に係る時間短縮だけでなく、教員の授業準備に係る負担軽減にもなる。しかし、実際に自分が授業で利用するとなると、更に部分的に特化して具体的に説明したい内容や更に補足して詳しく伝えたい内容があったり、逆に、もっと要点だけを端的に整理して伝えたい場合があったりと、指導者の意図や生徒の実態によっては扱いにくい面もあるのが難点である。今回は、主に能力的に低位の生徒や支援の必要な生徒の理解を深めることをねらいとして、併せて高い技術を必要とする生徒への対応も含めて、デザイン領域を中心にデジタル教材の作成を試みた。

子どもたちの実態として、表現活動自体は好きであるが、自分で考えたり工夫したりすることを苦手とする生徒が多い。また、試行錯誤しながらより美しい表現や自分らしい表現を追求することを面倒と考える傾向にある。特に、表現活動の始まりにおける発想や構想が困難な場合が多く、自分の表したいことやイメージが決まらないことが多々あるのが実状である。「自分らしく表現する」ためには、まず「こんなものがつくりたい」「こんな感じに表したい」という創造活動や表現活動に対する「思い」をもつことが重要である。しかし、生徒がこれまでの自分の経験からその「思い」に繋がる素材を引き出したり生み出したりすることはなかなか難しい。よって、表現活動の要所要所で「見ること」を効果的に取り入れ、作品や表現方法・材料等に出会わせることが大切である。様々な「もの」を見ることを通して、「自分だったらこれがいい（こんな感じが好きだ）」「自分の気持ちやイメージに合っているものはこちらだ」と色や形、表現方法や材料を選択し、テーマやイメージを一つずつ絞り込みながら決定し、「自分の思い」を明確にしていく必要がある。また、様々な「ひと」との対話や交流を通して、自分では思いつかなかった表現を参考にするなどして表現の幅を広げたり、他者との比較の中で「自分らしい表現」を見いだしたりすることができる。デザイン領域において、「見ること」を効果的に取り入れ、色や形の性質や感情を基にイメージを視覚化し、生徒の発想や構想の能力を高めていくことをねらいとして次のようなデジタル教材の作成に取り組んだ。

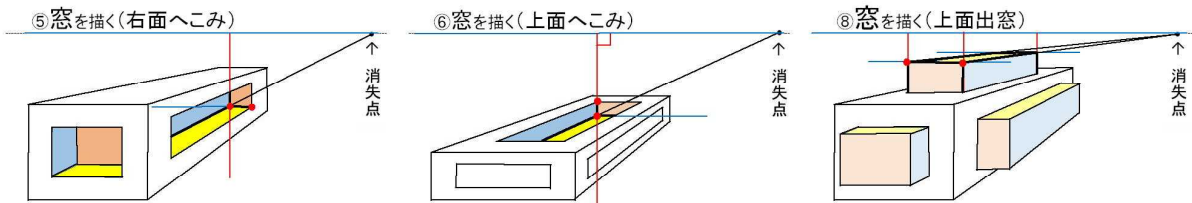
- ①レタリング（基本書体の特徴・描き方とポイント）
- ②色の性質（対比・膨張伸縮・トーン・色の意味）
- ③斜投影図法・等角投影図法の描き方
- ④一点透視図法・二点透視図法の描き方
- ⑤平面構成における構図のとり方（消失点の位置や水平線の向きを考えて）
- ⑥平面構成における配色計画の立て方（光と影の効果・構成やイメージによる）
- ⑦線織面の描き方と配色計画の立て方

【①「レタリング」（基本書体の特徴・描き方とポイント）】

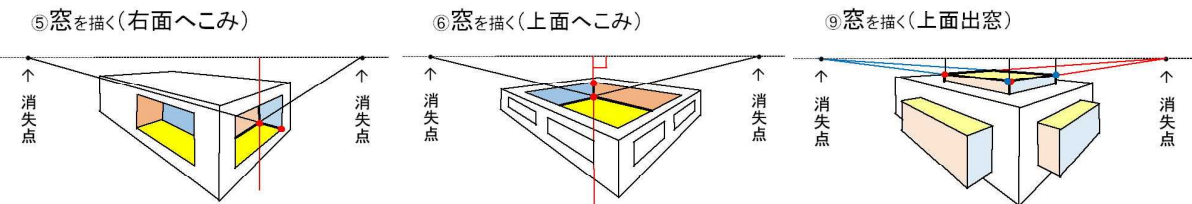


○形やバランスの取り方のポイントや間違いやすい点画について注目させるようにした。

【④「一点透視図法・二点透視図法の描き方」】



(一点透視図法)

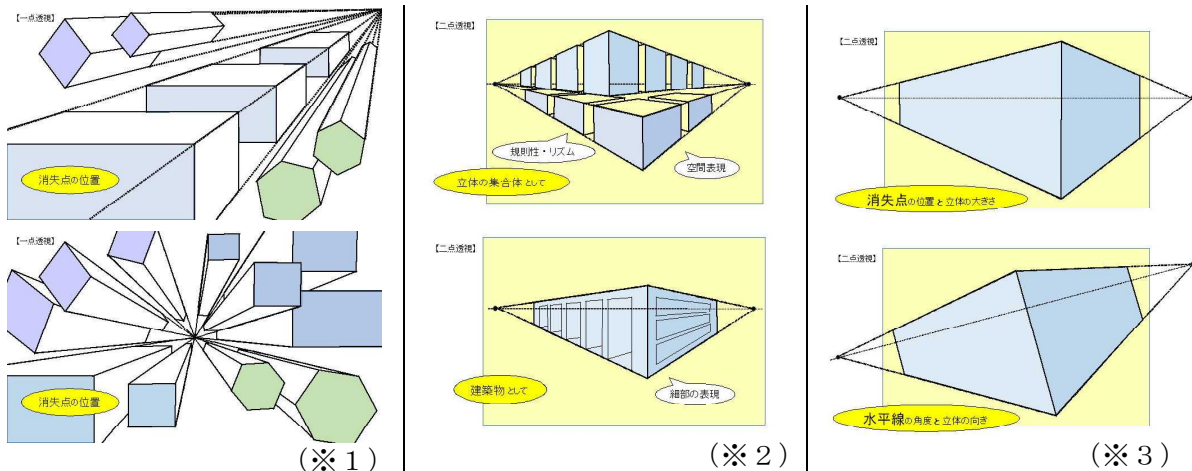


(二点透視図法)

○水平線や垂直線を意識させたり，消失点と結ぶ点を明瞭にしたりし，描く順序を分かりやすくアニメーションを用いて示した。

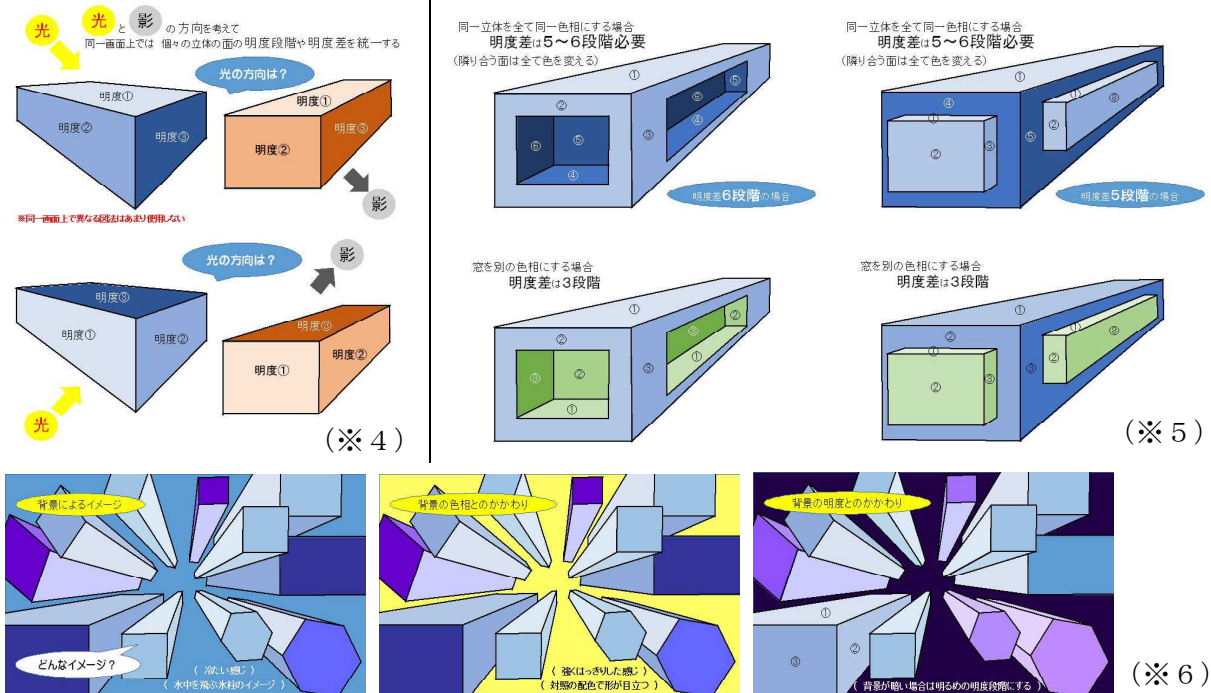
○1回の説明で理解しきれなかった生徒には，アニメーションを繰り返し再生して説明することで，理解を助ける。

【⑤「平面構成における構図のとり方」(消失点の位置や水平線の向きを考えて)】



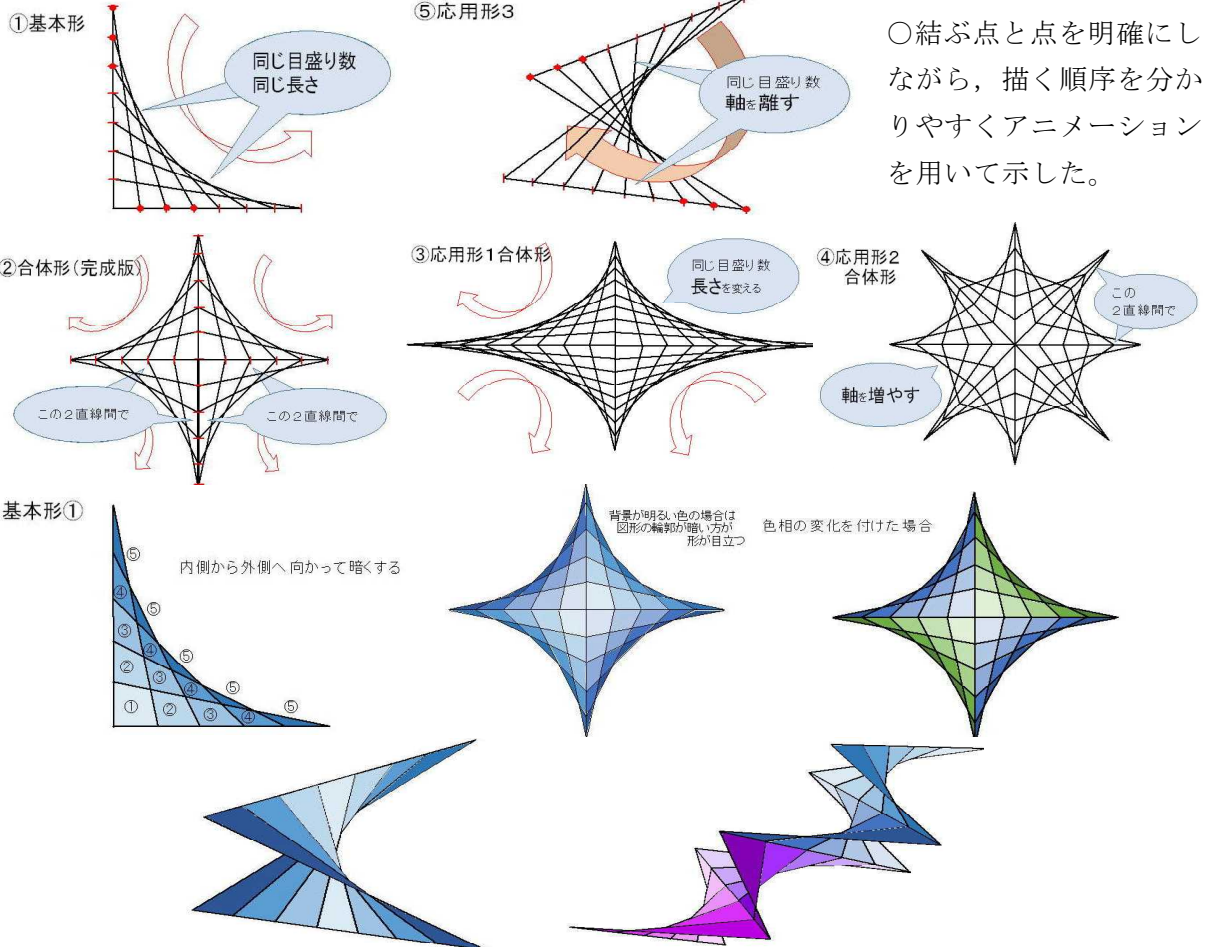
○消失点の位置と画面構成 (※1)，表し方やレイアウトと画面のイメージ (※2)，水平線の向きや消失点のとり方と画面の動き (※3) 等の関係について，基本的な構図を比較しながら示した。

【⑥「平面構成における配色計画の立て方」(光と影の効果・構成やイメージによる)】



○光の方向と明度段階 (※4), 立体感の表現と明度段階 (※5), 色の感情や明度・彩度・色相などの違いによる背景色とイメージの関係 (※6) 等について, 比較しながら示した。

【⑦「線織面の描き方と配色計画の立て方」】



○結ぶ点と点を明確にしながら, 描く順序を分かりやすくアニメーションを用いて示した。

（２）鑑賞の活動における提示型デジタル教材の作成と活用について

鑑賞のデジタル教材は、作品の図版等が豊富に収録されており、作品の解説も充実している。拡大して細部まで見たり、いろいろな角度から見たりできることが最大の利点であり、画面への書き込み等も可能である。しかし、指導者が求めるもの全てが収録されている訳ではない。そこで、題材や指導のねらいに基づいて、生徒の興味関心を高める作品や理解を助けるのに必要な資料を収集し、鑑賞のデジタル教材を作成した。拡大や切り取りの機能、必要に応じて合成や色加工等の編集機能を使って、絵の一部分を拡大して見せることによって、「見ること」に集中させ子どもたち自身の「発見」や「気づき」を促したり、逆に、絵の一部分を隠して何が描かれているかを想像させ「想像力」や「思考力」を働かせたり、生徒たちが主体的に学習できるように工夫した。また、リンク機能も活用し、生徒の「気づき」に合わせて学習活動がスムーズに進むように構成した。

鑑賞の形態は、主に「比較鑑賞」にした。一つの作品を様々な視点からよく見ることは意外と難しいものであるが、目の前に何らかの共通性を持った作品が並べられた場合、自然に作品を見比べ、作品をよく見るようになる。共通点や相違点を見つけることにより、結果として色や形等の造形要素に注目させることができるだけでなく、学習意欲を向上させたり積極的な発表や活発な対話を誘発させたりすることができるからである。さらに、楽しみながら自然に作品に積極的に関わることでできる絵画パズルやアートカードを効果的に用いて、興味関心や学習意欲を喚起させながら鑑賞できるように構成を工夫した。また、言語活動の充実を図るため、学習プリントで自分の考えを整理したり、ホワイトボードを用いて話し合い活動や意見交換を行った。

また、専門的な知識や指導経験のない免許外の教員にとっては、デジタル教材があってもそれを有効に活用することが難しいことが想像される。学習目標や活動内容を示すだけでなく、指導者自身が授業展開や指導方法をきちんと把握して学習を進められるように、ノート機能（発表者ツール使用時に有効）を用いて教員の発問や予想される児童生徒の回答、補足説明等を添付し、操作するだけで授業ができるように作成した。

- ①自画像とゴッホ（多様な表現と造形要素・ゴッホの作風の変化）
- ②印象派とモネの光の表現（「積みわら」にみる表現の工夫と作者の思い）
- ③浮世絵とジャポニズム（浮世絵のよさや表現の特徴と西洋への影響）
- ④富嶽三十六景（北斎の表現の工夫・作品に込めた思い）
- ⑤仏像にみる彫刻の美（仏像の役割や技法）
- ⑥琳派（宗達・光琳・抱一の表現と日本文化の伝統）
- ⑦ルネサンスの巨匠たち（三大巨匠の作品・表現技法と時代背景）
- ⑧ピカソの色と形（表現スタイルの変化と配色・作者の表現意図）
- ⑨ゲルニカ（構図や色に込めた作者の思いと表現意図）
- ⑩トリックアートの不思議（隠し絵・ひずみ絵・錯視・反転図形・不可能図形）

【①「自画像とゴッホ」(多様な表現と造形要素・ゴッホの作風の変化)】

アートカードゲーム
「同じ作者を見つけよう！」

ホワイトボード
(個人) (5分)

お気に入りの画家の作品
(2枚1組ペア)

1. 選んだ理由

表情? 感じ?
筆あと? 色?

2. 作品の感想

作風の変化

33歳 写実的 34歳 36歳 36歳

比べてみると 違いがよくわかるよ

表情(目・口)

比べてみると 違いがよくわかるよ

色

比べてみると 違いがよくわかるよ

筆あと タッチ

○学習の導入では、アートカードを用いて、画家たちの様々な自画像の中から同一作者のマッチングを行い、楽しみながら鑑賞の活動に入っていけるようにした。

○自画像の中から「お気に入りの作品」を選び、ホワイトボードを用いてグループで紹介することによって(意見交換による言語活動の充実)、多様な見方・感じ方に気付かせるようにした。

○プレゼンテーションソフトの切り取り・拡大機能を使ってポイント部分に注目させ、ゴッホの色や筆触等に注目しながら、表現のよさや美しさ、表現意図と工夫を味わわせるようにした。

【②「印象派とモネの光の表現」(「積みわら」にみる表現の工夫と作者の思い)】

ゴッホ

セザンヌ

ルノワール

スーラ

「日の出」
『印象派』
セネ

「睡蓮」

「ルーアン 大聖堂」

モネ
「積みわら」

	季節	時間	天気	印象

季節は? 時間は? 天気は?

モネは、なぜ同じモチーフを何度も描いたのだろう?

(春)・(～昼～)・晴れ

夏・朝・晴れ

秋・日暮れ・晴れ

冬・(昼?)・雪のち曇り

ミレーの「積みわら」と比べてみよう

○学習の導入では、印象派の画家たちの絵画パズルを行い、興味関心を高めながら色や筆触等に注目させ、それぞれの特徴をつかませるとともにその表現のよさや美しさを味わわせるようにした。

○モネの連作(積みわら)の作品を比較して、描かれた季節や時間等を考えることにより、観察力や想像力を働かせて作者の表現意図やその工夫を読み取らせるようにした。

○自分の考えを持ち寄りホワイトボードを用いてグループで話し合った後、全体でも意見を交流することによって、感じたことを共有したり多様な見方考え方に気付かせたりするようにした。

○印象派以前の写実的な作品と対比させてモネ独自の表現のよさや美しさを感じ取らせるとともに、様々な対象をモチーフとした連作を紹介し、モネが画家として追求したものを考え、主題に迫らせた。

【③「浮世絵とジャポニズム」(浮世絵のよさや表現の特徴と西洋への影響)】



○学習の導入では、アートカードを用いて、西洋に影響を与えた浮世絵とその影響を受けた洋画のマッチングを行い、意欲関心を高めるとともに色や構図等に注目させるようにした。

○部分を比較することによって線や陰影等に注目させ、それぞれの表現のよさや特徴をとらえるとともに、世界を魅了した浮世絵の魅力を味わわせるようにした。

【④「富嶽三十六景」(北斎の表現の工夫・作品に込めた思い)】



○書き込みや・切り取り・拡大機能を使って部分に注目させ、北斎の独創的な形の表現や大胆かつ緻密な構図等に注目しながら、表現のよさや美しさと工夫を味わわせるようにした。

○連作の中から「お気に入りの作品」を選び、ホワイトボードを用いてグループで紹介することによって(意見交換による言語活動の充実)、自分の感じ方や考えに自信をもてるようにした。

○富士のセリフを考えることにより、描かれている場面や人物の心情について想像を膨らませるとともに、様々な富士の姿や人々の暮らしを見て、富士を描き続けた北斎の思いに迫らせた。

【⑤「仏像にみる彫刻の美」(仏像の役割や技法)】

どのお顔がどんなポーズをしている？
(クイズのため少し色を変えています)



あしから
阿修羅

152.3cm だっかつかんづくり
木造(脱活乾漆造)
奈良時代
興福寺

もともとは仏教に敵対する邪神の一人、闘いを好む鬼神であった。釈迦の教えを聞くうちに、仏教を守る八部衆の守護神となった。改心した深い心情が、憂いを帯びた表情となって表れている。

どんな表情をしている？

3つの顔を比べてみよう



(左)『子ども』
怒り 偏見
(反抗している)

(正面)『大人』
悲しみ or 怒り
(心が浄化され、
決意がたまる)

(右)『思春期』
悩んでいる
(これまでの自分を
反省している)



下から見上げると...



木造

よせぎづり

『奇木造』



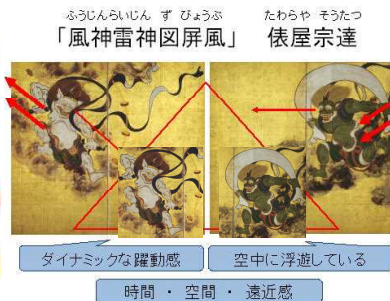
阿修羅

妙法院
鎌倉時代



- 学習の導入では、カードを用いて仏像の顔(表情)と手のマッチングを行い興味関心を高めるとともに、姿や表情に込められた激しさや優しさ等の仏像の美しさを味わわせるようにした。
- 正面から見た姿と下から見上げた姿を対比させたり、制作工程を紹介したりして、仏像の迫力や作者の表現意図と工夫を感じ取らせるようにした。

【⑥「琳派」(宗達・光琳・抱一の表現と日本文化の伝統)】



「紅白梅図屏風」尾形光琳

①紅梅と白梅を人間にたとえると？

幹の太さ 花の咲き方

枝の方向 けの生え方

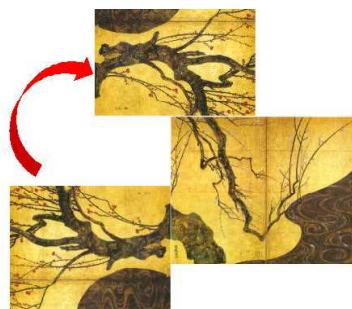
②大きな黒い曲線は何？

③構図の工夫点は？

目線？ 繋がること？

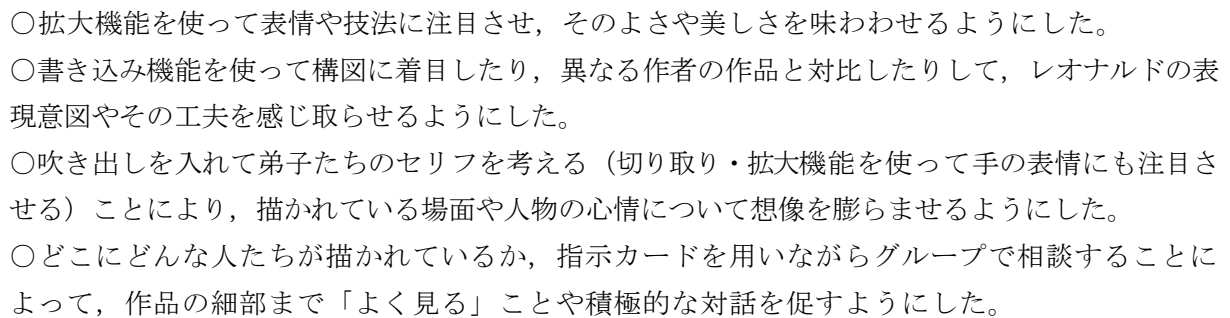
④光琳の思い(伝えたいことは？)

①	白梅	紅梅
	男性？女性？	
	若者？老人？	
②	曲線	
③		
④		



- 書き込み機能を使って部分に注目させ、風神雷神の動きや画面から聞こえる音を感じ取らせたり、切り取り機能を使って構図の工夫に気付かせたりした。
- 紅梅や白梅が何を表しているのか、構図にどんなトリックが仕掛けられているのか、グループで話し合ったりカードを使って解明したりしながら、作品に込められた光琳の思いや表現の工夫に迫らせるようにした。

【⑦「ルネサンスの巨匠たち」(三大巨匠の作品・表現技法と時代背景)】



◆「泣く女」

◆ 誰の作品？

ピカソ

◆ どんな描き方

「キュビスム」

対象をいろいろな方向から見て再構成する

◆ 何歳の時の自画像？ ～さまざまな表現方法～

ア

イ

ウ

エ

オ

ピカソ

ピカソ

◆ 比べて見てみよう

どんな気持ち？

どんな性格？

どんな描き方？

「キュビスム」

とがっている

直線的

丸みがある

曲線的

どんな印象？

◆ どの時代の作品？

A「アヴィニョンの婦たち」

B「サルタン・パンクの家」

C「人生」

D「三人の音楽師」

E「海辺の母と子」

私がピカソだったら どんな色を使う？

イメージ

ドラ・マールさん

マリー・テレーズさん

○学習の導入では、キュビスムの絵画パズルを行い、部分の形に注目することで表現技法についての理解を助けたり、ピカソの独創的な作風のよさやおもしろさを感じ取らせたりするようにした。

○アートカードを用いて、自画像を年代順に並べたり時代毎の代表作をグルーピングしたりして、生涯探求し続けた多様な表現方法を味わうとともに、時代毎のピカソの心情等に触れた。

○色彩加工機能を使って作品を白黒にすることにより、形がもたらすイメージをとらえ、それを基に自分で配色・彩色することで、感じたイメージを色で表現した。(色の感情や性質の理解)

4 成果と課題（主に鑑賞のデジタル教材活用について）

【生徒の感想】

○鑑賞に興味があったので美術館の作品も見に行きたい。

○今まで以上に、様々な画家のそれぞれの特徴をもっと知りたいと思った。

○カードやパズルで様々な作品を見ることができ、特にパズルは楽しかった。

○作品を大きいサイズで見たり、近くで見たりして、絵を細かい部分までよく見ることができておもしろかった。

○西洋の絵と日本の絵では表現の仕方が違っていて、その違いを探ることが楽しかった。

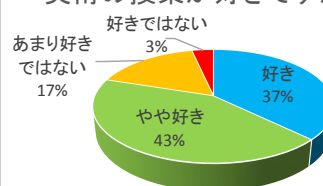
○絵をじっくり見てみると、作者が伝えたいことが伝わってくるんだなと思った。今度から美術館に行ったとき、作者がどんな思いで描いたのかなども考えてみたい。

○作品を見て班で話し合うことが楽しかった。

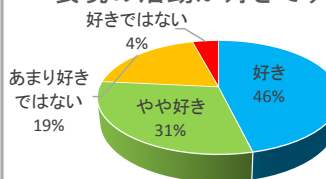
○友達の見方を聞いて分かったことなどもあって、さらにいろいろな作品を見たいと思った。

○友達や先生の見方や感じ方を聞いて、別の見方をすることができておもしろかった。

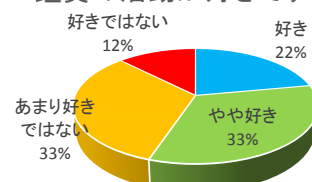
美術の授業が好きですか？



表現の活動が好きですか？



鑑賞の活動が好きですか？



【教員の感想】

○作品の見方が分かり、鑑賞が身近に感じられた。

○ICTの活用によって、教科書の小さい作品や資料を見るのと違って、大きな画面で色鮮やかに作品を鑑賞することができるのがよいと思った。

○作品の解説や作者の生い立ちを説明するだけでなく、パズルをしたり、セリフを考えたり、2つの作品を見比べて相違点を見つけたり、生徒が考える活動がたくさんあってよかった。

○鑑賞させたい作品が1つのプレゼンテーション教材としてまとめられていること、作品を効果的に見せることができるのがよいと思った。

○1時間にたくさんの作品を見るのはよいことだが、あまり多すぎるのは時間的に無理があるように感じた。生徒の実態を考えるともう少し精選してもよいと思う。

○グループでまとめたホワイトボードを消してしまうのはもったいないので、何か記録に残

す方法があればよいと思った。(逆にプリントはカード等を直接貼ることなどはできない。)
○パズルの活動は生徒たちが楽しんでやっていた。自分で作るとなるととても面倒なので、授業で使える絵画パズルやアートカードのような教材があると活用できるなあと思った。
○言語的な表現のマニュアルがあれば、生徒が参考にすることができると思った。

【成果】

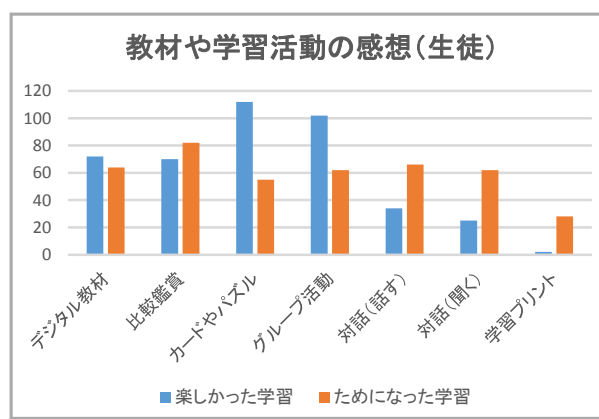
プレゼンテーションソフトによるデジタル教材を活用することによって、生徒は作品に興味関心をもち、主体的に鑑賞の学習に取り組むことができた。また、比較鑑賞により、造形要素にも着目して鑑賞することができていた。授業後の生徒の感想やアンケート結果

(図3参照)からも分かるように、デジタル教材の活用は、生徒の関心意欲の向上に相応の成果があったと言える。しかし、それ以上に、デジタル教材と併用して使用したカードやパズルを用いた学習やグループ活動について、多くの生徒が楽しかったと答えている。このことから、自分の目や手を使って操作したり考えたりする活動的・能動的な学習の方が、ただ作品を見て気付いたことや感想を書いたり解説を聞いたりする受動的な学習より、学習意欲の向上のために有効に働くということが実証された。また、友達の意見を聞いたりグループで話し合ったりすることが、自分のためになったと答えた生徒も多かった。実際に、授業の中でも、自分と同じよう

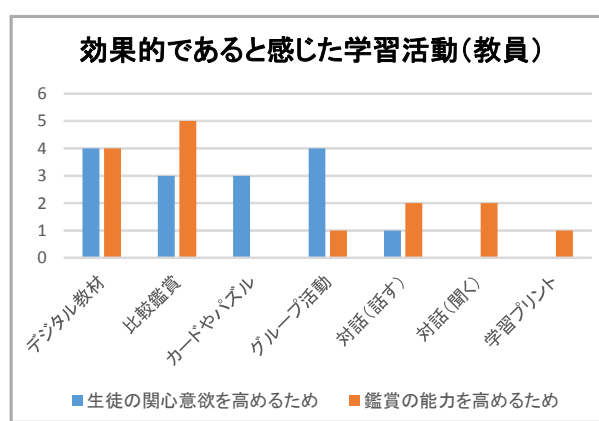
な友達の意見を聞いて自分の考えに納得したり、様々な見方感じ方があることを知り、友達とは違う自分の考えにも自信をもってそれを主張したりする姿を見取ることができた。デジタル教材や生徒の能動的な活動を促す様々な教材の活用が生徒の関心意欲の向上や対話の活性化を促進したこと、また、それらが「よく見る」「感じ取る」「想像する」「考える」学習(主体的な学び)につながったのではないかと推察することができる。

【課題】

授業後の教員の感想で課題として挙げられた「1時間の授業で鑑賞する作品数や内容量」「ワークシートの活用の仕方」「言語活動の充実のための支援」等については、より効果的に教材を扱うために更なる検討が必要である。



(図3)



(図4)



○学習量については、情報過多になり生徒が混乱しないように、生徒の実態（鑑賞経験や鑑賞の能力）や授業中の反応を見ながら精選していくとよい。

○ワークシートについては、「個で考えるのか」「グループで話し合うのか」「全体で交流するのか」効果的な学習形態を考えたとうえで、それに合った適切なスタイルで作成しなければならない。ホワイトボードでの学習はデジタルカメラで撮影するなどして記録に残すこともできるが、対話を通した個々の学び（個→集団→個）を生徒自身が振り返ることができ、なおかつ、大切な評価資料となるワークシートを作成する必要がある。

○言語活動の充実については、語彙カード（図5参照）を参考にさせることで、感じたことや考えたことについて自信をもって表現したり発表したりすることができる。

○積極的にグループ活動を取り入れる場合、積極的な生徒だけの活動とならないように、少人数で編成する、役割分担をする等の工夫が必要である。

○プレゼンテーションソフトのメモ機能や発表者ツールにより、適切な発問や解説を行いながら授業が進められるようになっているが、初めて使用する場合は事前の予習がかなり必要である。

明るい	力強い	静かな	平面的
やわらかい	迫力がある	さみしい	立体的
やさしい	激しい	悲しい	写実的
かわいい	荒々しい	さわやかな	抽象的
夢のある	派手な	すっきりした	装飾的
落ち着いた	あざやかな	シンプルな	遠近感
おだやかな	暖かい	かっこいい	暖色（暖色）
のどかな	元気な	透き通った	寒色（寒色）
和風な	楽しい	濃く通った	厚塗り
不思議な	にぎやかな	繊細な	薄塗り
神秘的な	おもしろい	涼しい	タッチ
不安な	暗い	冷たい	点描
			輪郭線
			明暗
			陰影

（図5）



6 まとめ

美術科における提示型デジタル教材の活用は、「鑑賞作品の効果的な提示」「学習内容の焦点化」「造形要素や技法等の理解の補助」「イメージの視覚化」「対話の活性化」「目標の明確化や指示的的確な提示」「板書時間の削減」「教員の指導法の改善や教材準備の効率化」「資料のコンパクト化」等々、様々な展望をもっている。表現領域のデジタル教材については、タブレット端末にインストールしておけば個の能力やペースで繰り返し視聴できるため、一斉指導で理解が不十分であった生徒や理解に時間を要する特別な支援の必要な生徒にも対応でき、個に応じた指導に効果を発揮すると思われる。

今後も、生徒の興味関心や実態に合わせて、デジタルとアナログの融合や表現と鑑賞の関連を図り、美術の基礎的な能力や豊かな感性の育成を目指した主体的な学びについての研究を進めていきたいと思う。



7 参考文献

「デジタル教科書」の現状と課題 文部科学省
www.mext.go.jp/b_menu/shingi/.../1359569_3.pdf

「学びの過程の中で協働的な活動を効果的に取り入れる指導の工夫」
東京都教育委員会 東京都教職員研修センター研修部 教育研究員研究報告書
www.kyoiku-kensyu.metro.tokyo.jp/09seika/.../h27chu-bi.pdf

「美術の基礎的な能力を伸ばす指導の工夫」
—デジタル教材の活用による関心・意欲の向上と主体的な学習態度の育成—
糸満市立潮平中学校 伊敷 学
www.edu-c.open.ed.jp/post.html -

興味関心を高め、基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用

三好教育研究所 研究員 常村 淳

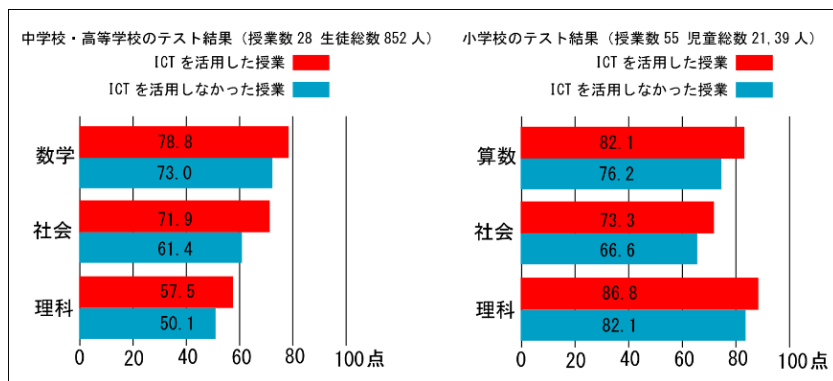
1 はじめに

ほとんどの生徒は、ICT を使った授業が好きで、集中して授業に取り組むことができる傾向がある。このことを利用して、ここ数年 ICT を使った授業を取り入れてきた。私にとっても、生徒が興味関心を寄せるようなデジタル教材を工夫して作成し、授業で使うことにやりがいを感じている。生徒の成績も ICT を使う前と比較すると明らかに向上していた。しかしまだ満足できる授業力には至っていない。ICT を活用してもっと魅力的なもっとわかりやすい授業ができるのではないかと考えている。この研究に取り組むことによって ICT 活用について幅広い知識を身につけ、日々の実践につなげていきたい。

2 主題設定の理由

どのような授業をすれば生徒の意欲や関心を高め、なおかつ基礎学力を向上させることができるのかについて、長年試行錯誤してきた。その過程で失敗も多く経験した。そして、一般によく言われていることだが、あきがこない、わかりやすい授業を行うことが大切であると再認識した。それ以来、いろんな資料（写真・ビデオ・イラストなど）を用意して提示したり、なるべく多くの生徒に発問したり、授業の終わりに自作の学習プリントを行ったりするなど教師が前でしゃべって説明して終わるという授業はしないようにしてきた。そして数年後には、生徒も自分も充実した1時間だったなと思える授業も時々できるようになった。ある程度の成果が出たことで、もっと生徒が関心を持ち、授業に変化をもたせ、わかる授業をするために効果的なものはないかと思っていたときに、ICT 機器（パソコン）を使った授業に出会った。それは約25年前の研究会でのことだった。簡単な自作のデジタル教材を使った社会科の授業だったが、とても新鮮で興味深い授業だった。生徒も興味深く、集中して授業に取り組んでいた。その当時パソコンは、まだ学校に多くは入っていないし、処理能力も低かったが、生徒の興味関心を高め、わかる授業を行うのに使っていけるかもしれないという期待をもつことができた。そして現在は、ほとんどの学校に授業で生徒が一人1台ずつ使えるパソコンが導入されており、ICT を活用した授業を行う環境は整っている。

平成17・18年度に文部科学省が外部に委託して行った調査研究において、『全国で実施された検証授業を分析した結果では、ICT を活用して授業を行った教員の98%が、「関心・意欲・態度」の観点において効果を認めていた。それ以外の観点（知識・理解、思考・判断、技能・処理）やICT活用によって児童生徒が集中して取り組めるようになることや児童生徒が楽しく学習できるようになること等についても、多くの教師が効果を認めていた。また、児童生徒に対する調査によれば、学習に對



文部科学省「教育の情報化に関する手引き」について

平成17・18年度 教育の情報化の推進に関する研究結果より

する積極性や意欲、学習の達成感など全ての項目について、ICT を活用した授業の場合の方が評価は高かった。さらに、児童生徒に対する客観テストの結果によれば、各教科の得点や「知識・理解」や「技能・表現」の観点で高い効果が得られた。以上のように、ICT を活用して教科指導することは、児童生徒にとって基礎学力向上に高い効果があることが明らかとなっている。』と分析されている。つまり、教師にとってメリットの多い指導法であるということがいえる。

以上のことから教科指導において、ICT を積極的に活用していく必要があるといえるが、具体的な自作デジタル教材の数や活用事例は豊富とはいえない状況である。そこで、生徒の興味関心を高め、学力向上に役立つデジタル教材を開発し、その活用法を研究することで授業力の向上を図ろうと思い、この研究主題を設定した。

3 研究の概要

本研究では、最初に教科の学習内容のなかでデジタル教材化できるものを探した。デジタル教材化の基準は、自由に拡大できる写真や図表、アニメーションなどにしたほうがわかりやすいもの、問題を解きながら学習を進めていったほうがよいものなどである。デジタル教材化の方法は、ICT 機器（パソコン）のデジタル教材を作成できるソフトウェアを使って作成した。

この研究で特に中心においたのは、作成したデジタル教材による自主学習システムの構築である。簡単にいうと、自作のデジタル教材で単元の復習を行うということである。そして復習の後にパソコン上で確認テストを行い、理解度を教師、生徒の両者が確認できるようにするシステムである。作成したこれらのデジタル教材を実際に授業で使い、その効果と課題について検証した。

4 研究の内容

（１）作成したデジタル教材

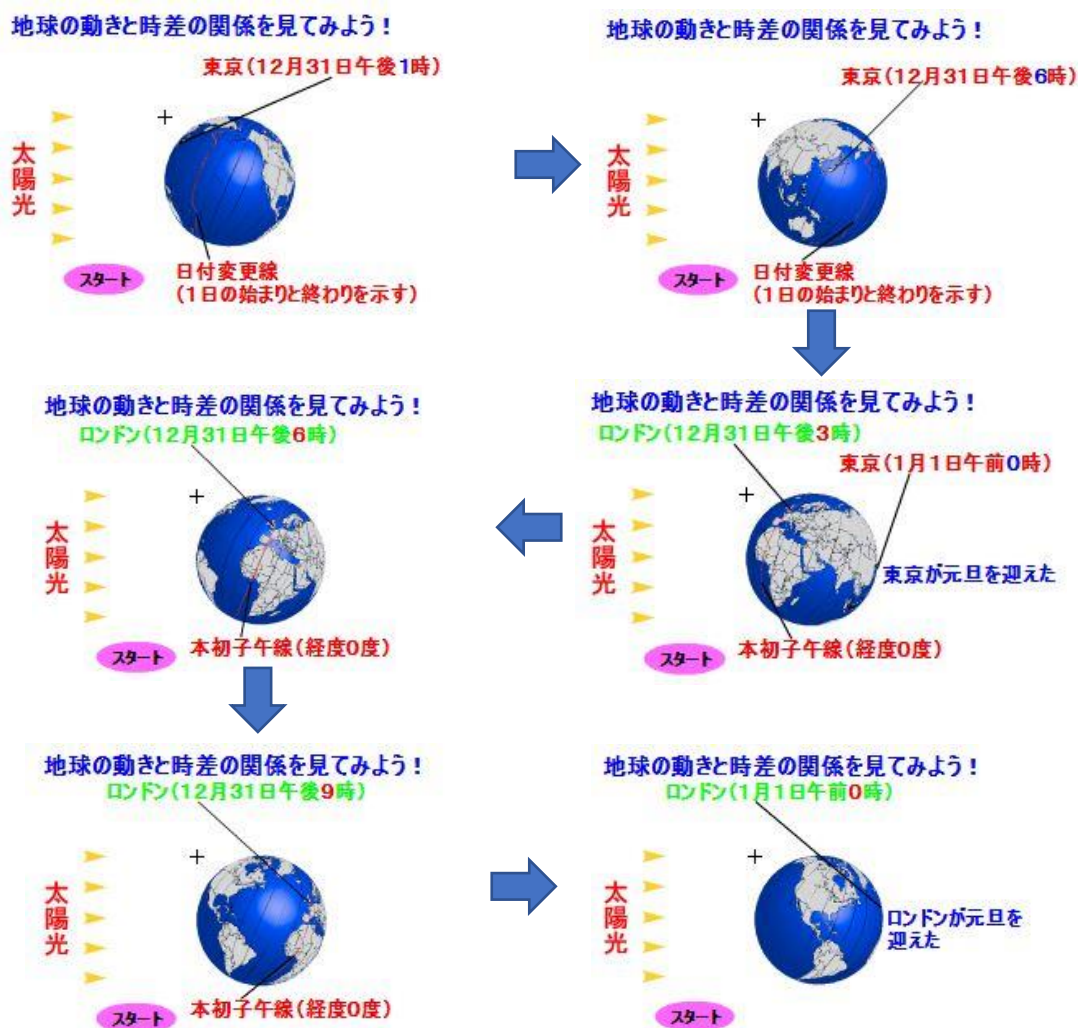
①仕組みを解説したアニメーション

・時差の学習

これは中学校社会科地理分野での時差についての学習用に作成したデジタル教材である。今までには、黒板に世界地図（掛図）を掲示して東京とロンドンを経度差が135度なので、時差は9時間になる。というように地図上で東京とロンドンを指し示しながら口頭で説明していた。そして、東京とロンドン以外の都市で時差は何時間になるかというような問題を出し、時差を求める計算ができたならそれで終わりにしていた。

後日、確認テストや実力テストに出題されていた時差の応用問題の正解率はかなり低い結果であった。これはどうしてかと考えてみた結論は、授業中に口頭で説明した内容がほとんど理解できていないということである。そして、時差を求める計算方法だけを覚えようとしていたため、テストでその計算方法を忘れてたり、応用をきかせた問題には対処できなかったため、低い正解率になったと考えられた。

では、どのように指導したらいいのかと考えてみて思いついたのが、アニメーションを使ったデジタル教材を作成することである。どうして時差ができるのかという時差のしくみをわかりやすく示すために、地球の自転をアニメーションで表し、アニメーションの動きにあわせて解説文が表示されるようにした。さらに口頭での説明も付け加えた。時差についてそのしくみから理解することで、応用問題にも対応できると考えた。

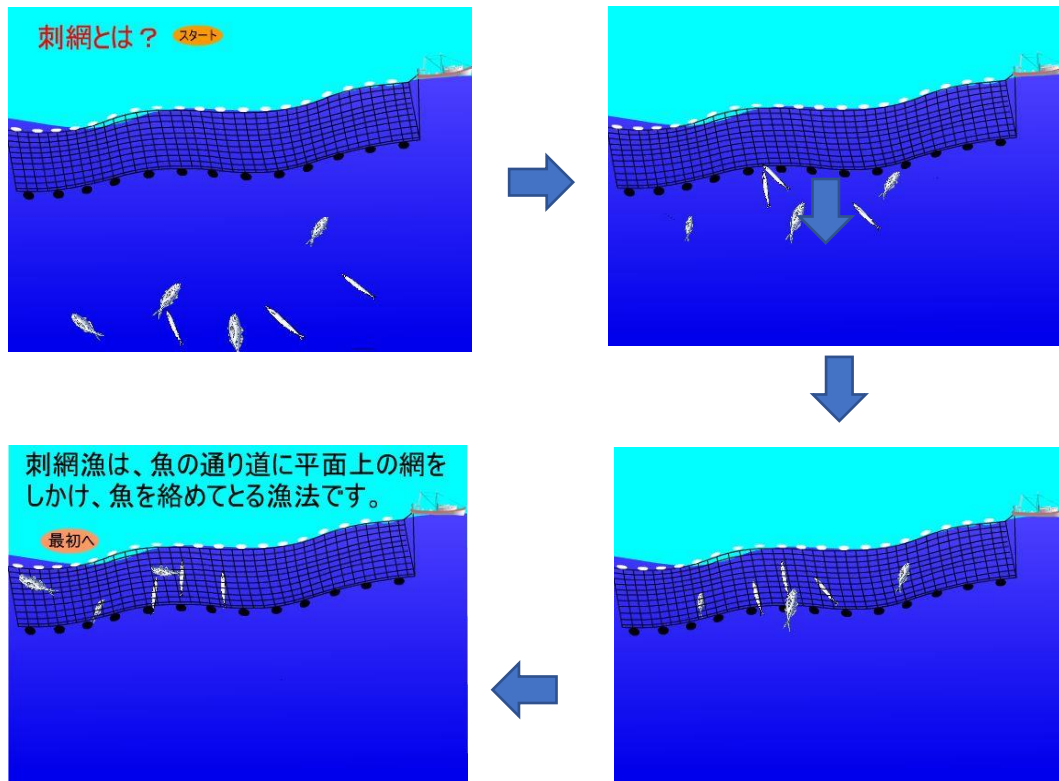


授業で使ってみた後の生徒の反応は、「アニメーションにするととてもわかりやすいや時差のしくみが納得できた。」というもので、その後に実施した確認テストの正解率もほとんどの生徒が上がり、デジタル教材の効果を実感できた。

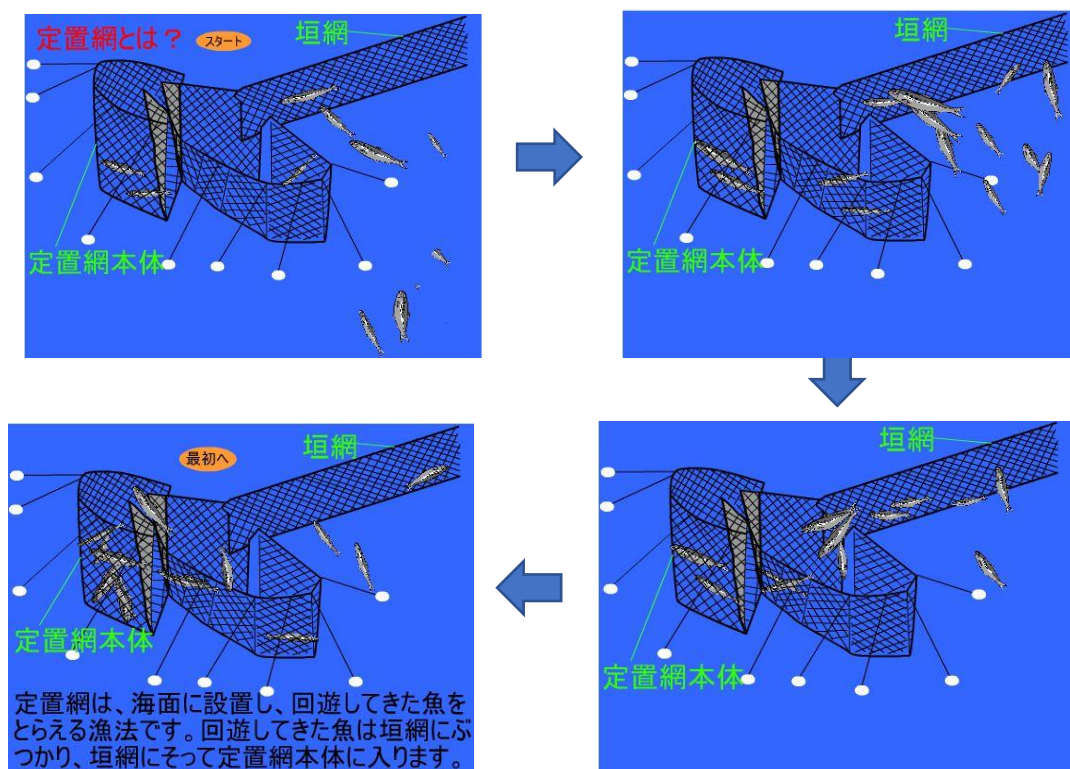
・漁業の種類

これは、中学校社会科地理分野における日本の漁業という単元の中で、漁業の種類を理解させるための、アニメーションを使ったデジタル教材である。日本の漁業の学習時に、日本ではどの種類の漁業が主力になっているのかなどについて知らせる場合は、日本の漁業の種類別割合を表したグラフを提示すればいいが、そこに出てくる名前は、はえ縄漁・刺網漁・定置網漁・底引き網漁・船びき網漁・巻き網漁という名前であり、海から遠い三好市に住む大部分の生徒には、言葉から想像するあいまいなイメージしかもつことができない。このままでは日本の漁業の種類別割合のグラフを見せても頭の中に残らないのである。漁業の種類についてその名前だけでなく中身を知ることによって漁業の種類別割合を表したグラフの数値の大小の意味について考えることができるのである。以上のことから漁業の種類自体を写真やビデオなどで見せる必要があるが、写真は一部分しかみることができないし、ビデオは手間がかかり気軽に見ることができない。そこでアニメーション化することにした。ここでは、刺網漁と定置網漁の2種類の例を出しているが、実際には底引き網漁・はえ縄漁・船びき網漁・巻き網漁のアニメーションも作成している。

(刺網漁)



(定置網漁)

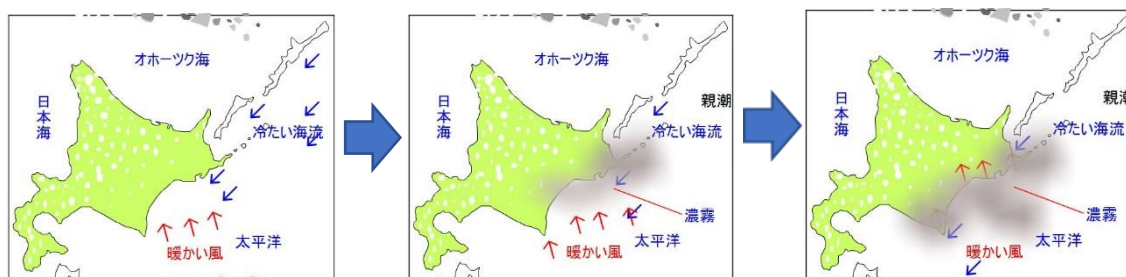


以上のアニメーションは生徒にとってまったく未知のものであったので、授業でもとても好評であった。人間の漁における工夫に感心するとともに漁業に対して興味関心をもつことができたようであった。

②社会的事象と場所を結びつけたアニメーション

・北海道の自然

このデジタル教材は、北海道の自然について学習する時に作成したものである。下図には北海道の降雪、流水、濃霧というアニメーションが3つあり、そのうちの濃霧についてのアニメーションを再生した様子である。ポイントは、自然現象を説明するアニメーションに場所の情報が加わったことである。自然現象と場所を結び付けて見せて解説することで、自然現象がそれぞれの地域の人々の生活にどのような影響を与えているのかを想像させ、後の学習につなげることができる。

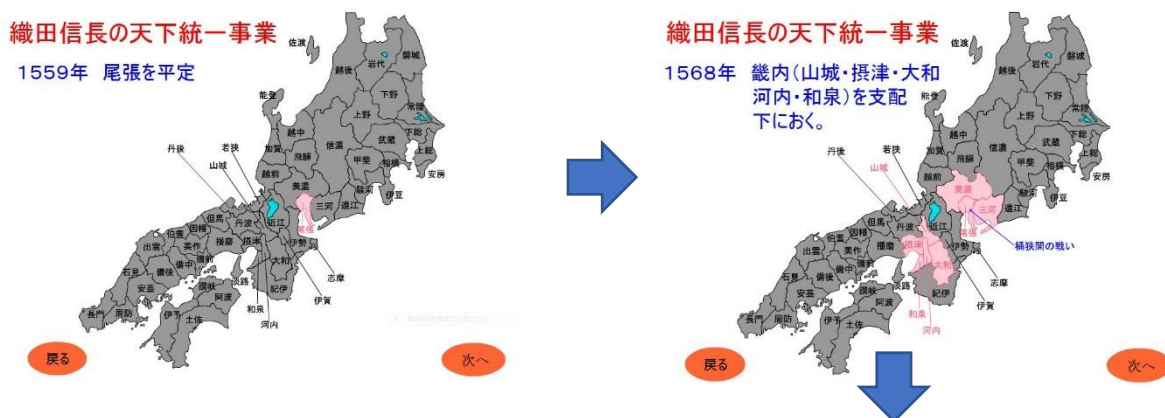


中学校学習指導要領解説の社会編（地理）にも『場所の自然的特徴に関する知識，あるいは人々の環境への関心や行為は，人間と場所の相互依存関係を理解するための基礎となる。』また、『人間と自然環境との相互依存関係について考えることは，地域的特色を理解したり，地域の環境開発や環境保全を考えたりする際の重要な基礎となる。』と書かれているように，ここから深い学びにつなげていくことができる。

・織田信長の天下統一事業

これは、織田信長の天下統一事業について学習した時のデジタル教材である。信長がしかけた戦いや支配していった国などを，時間経過に沿って地図上に表したものである。このようにすることで時間経過と場所の情報が結びつき，信長が年々着実に支配地を広げていったことがよくわかる。また，戦国時代の国名についても知ることができる。

このデジタル教材を使ったときの授業は，戦国時代に興味をもっていた生徒が多かったこともあり，積極的に信長のことについて質問したり，知っていることを発表したりする生徒が多かった。もし信長の天下統一事業について口だけで説明し，板書していったとしたら信長の支配地の広がりイメージすることは難しかっただろうと思う。こうした教材をつくり，活用することができるのがコンピューターを使った ICT の強みである。



織田信長の天下統一事業

1573年 浅井、朝倉氏を破り
越前、近江、若狹を
平定

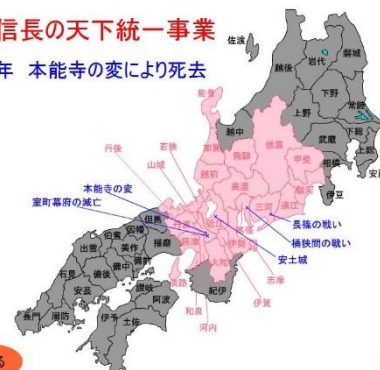


戻る

次へ

織田信長の天下統一事業

1582年 本能寺の変により死去



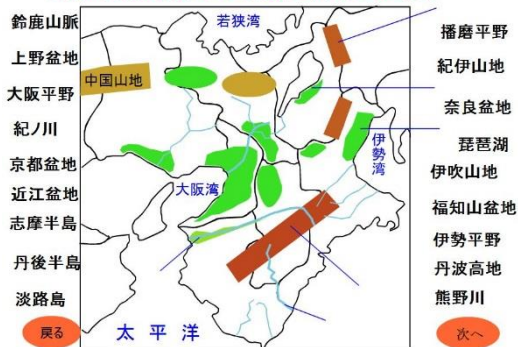
戻る

次へ

③作業を取り入れたデジタル教材

- ・作業Ⅰ（名前と地形を結びつける作業）

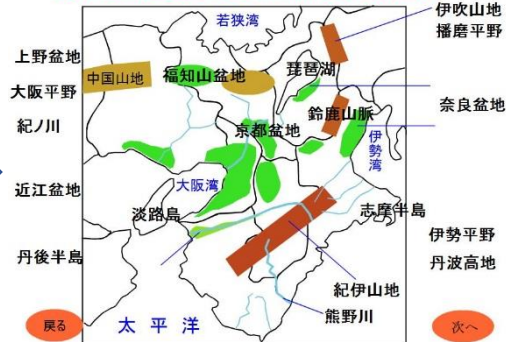
※次の自然名をあてはまる場所にドラッグしましょう。



戻る

次へ

※次の自然名をあてはまる場所にドラッグしましょう。

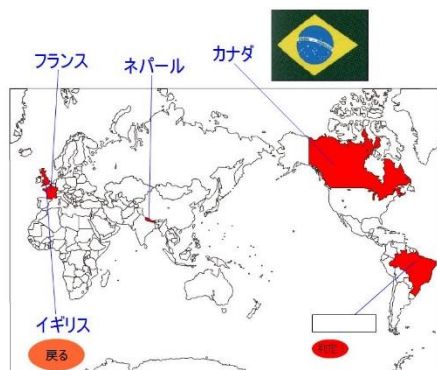


戻る

次へ

これは、近畿地方の自然環境について学習したときに作成した教材である。使い方は、枠外の自然名をあてはまる場所にマウスでドラッグアンドドロップする，というように簡単な操作でできるようにしている。そして，それが正解ならそこに自動的に吸着し，間違っていたらはじかれるように設定している。ポイントとしては，正誤がすぐにわかること，教科書や地図帳を見なくても自然名をたよりに試行錯誤して完成させることで，自然名とその位置が記憶しやすいということなどである。このマウスでドラッグアンドドロップするという機能は，生徒に作業をさせたり，設問に対する解答をさせる場面で数多く使用した。

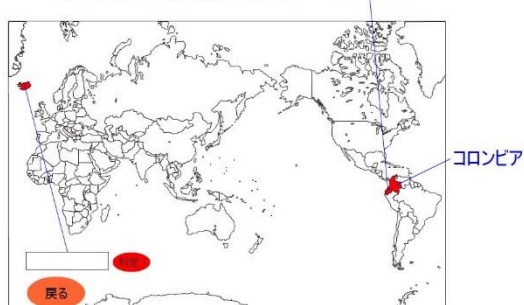
- ・作業Ⅱ（国名と位置を結びつける作業）



戻る

国名の由来

「氷の国」という意味をもっている。



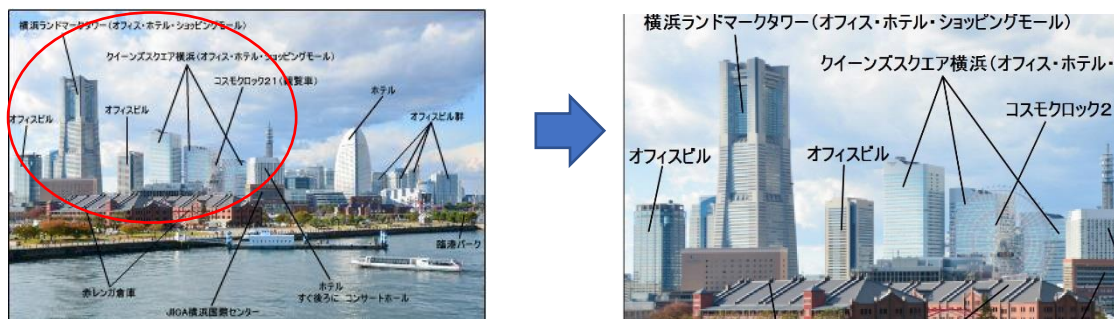
戻る

上図は，いろいろな国について学習したときのデジタル教材の内容の一部である。国旗や国名の由来をヒントにして国名を答えるという問題形式にしている。地図をいっしょに表示することで国名と位置を同時に覚えられるようにしている。このように問題形式にすると生徒は楽しんで取り組

むことができるので、授業の導入などで使用した。

④資料（イラストや写真など）を活用したデジタル教材

・拡大図



この写真は、日本の諸地域（関東地方）の中で、再開発について学習する時に作成した横浜の「みなとみらい21」地区についてのデジタル教材である。再開発によってどのような街に姿を変えたのかを生徒に知らせるには、「みなとみらい21」の中心部の概観がわかる左の写真から、右の写真のように確認したい場所を拡大して見ることであれば、よりわかりやすい。そこで、このデジタル教材では見たいところをマウスでクリックすると、その部分を中心にして、設定した倍率で拡大することができるようにしている。右の写真は、左の写真の赤枠の部分のマウスでクリックして800%に拡大した例である。クリックした所をピンポイントで拡大表示できるところが重要なポイントである。この教材を使って、生徒に街の特徴や興味をもった所、疑問に思った所などを発表させていくことができる。

・地図と写真の連携



これは、北海道の観光地を写真で確認するというデジタル教材である。しくみは地図にマークをしておき、そこをマウスでクリックするとその場所の写真を見ることができるという単純なものである。世界や日本の諸地域の中の自然や観光地などのように、名前を知るだけでは印象に残らない学習内容の場合は、このような教材を作成して使うようにしている。ここでの写真も上記の拡大図のように、クリックするとその部分が拡大され細部を確認できるようにしている。そして、写真の細部を見てわかることや疑問に思ったことなどを発表させるようにしている。

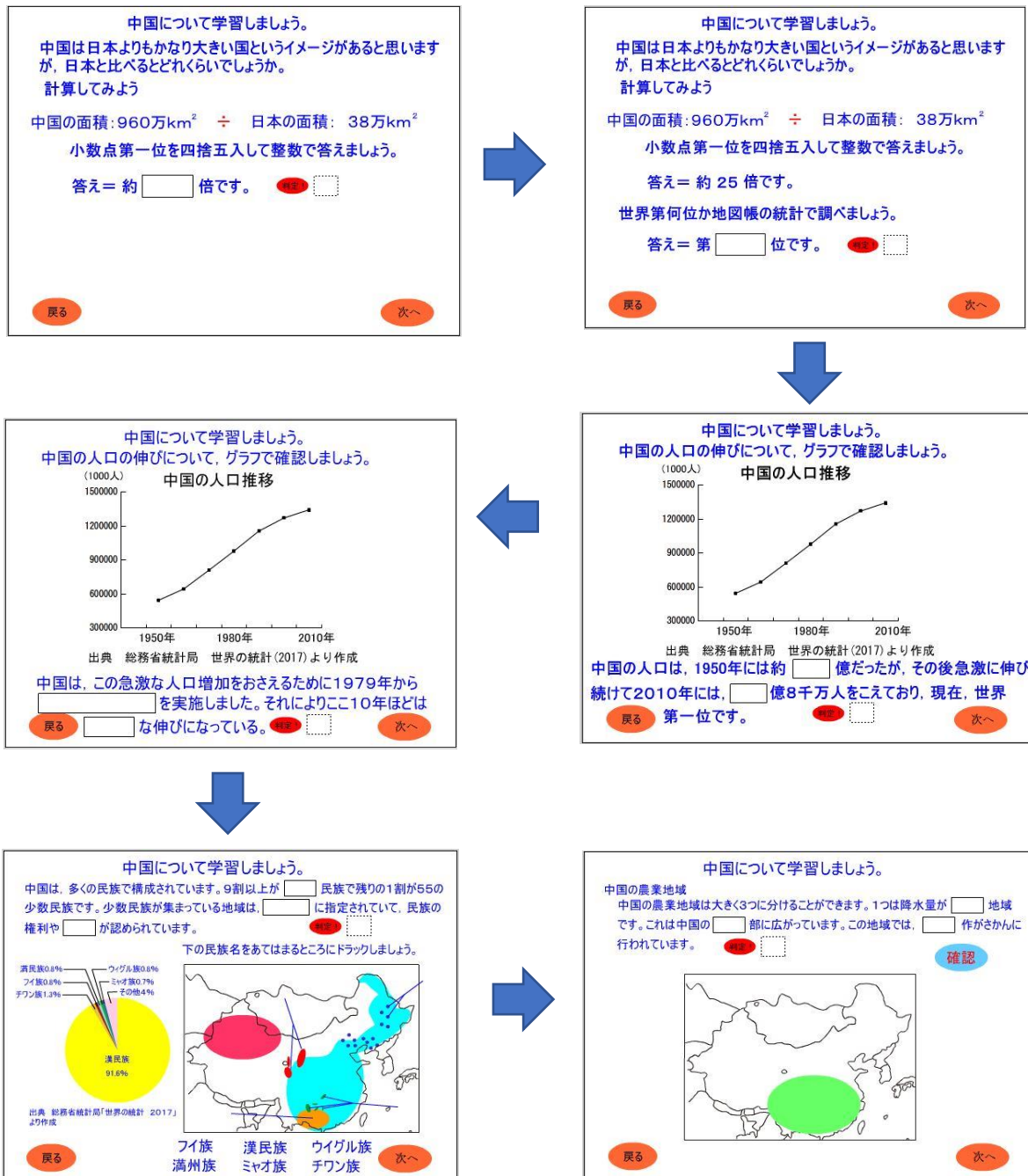
（2）自主学習システム

①デジタル自主学習教材

上記のデジタル教材は、わかりやすい授業をおこなうためのものであった。これらを使った授業では、生徒の興味関心が高く、とてもわかりやすかったという生徒が多かった。ある程度予想はし

ていたが、自分でもデジタル教材の学習効果を実感できた。そして、このデジタル教材をもっと活用できないかと考え、思いついたのが、復習のためのデジタル自主学習教材にできるのではないかとことである。具体的には、授業で使ったデジタル教材を組み入れ、パソコン上で問題を解きながら個別に復習をしていくというものである。次にその例をあげておく。

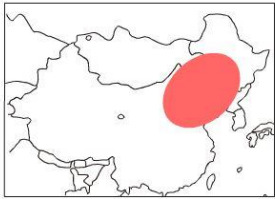
・中国の学習



中国について学習しましょう。

中国の農業地域
2つめは、比較的降水量が少なめな地域です。これは中国の 部に広がっています。この地域では、小麦や などの 作が行われています。

確認

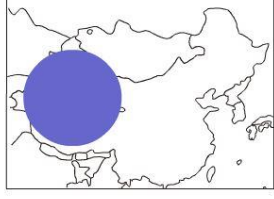


戻る 次へ

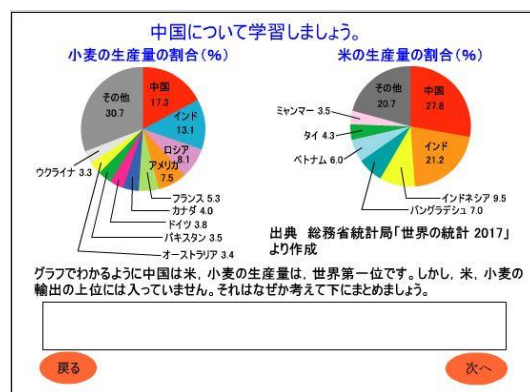
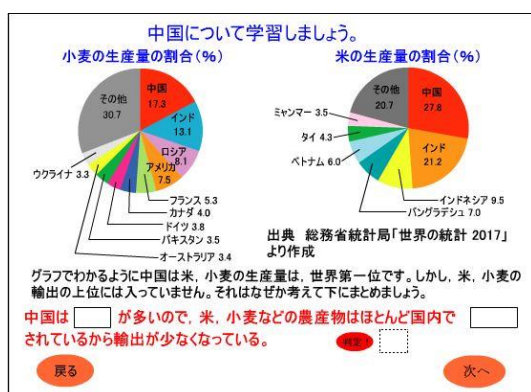
中国について学習しましょう。

中国の農業地域
3つめは降水量が非常に少ない地域です。この地域は、中国の 部に広がっています。この地域では、おもに がさかんです。

確認



戻る 次へ



中国について学習しましょう。

米、小麦以外で中国が生産量で世界第一位の農産物は何があるでしょうか。下からあてはまる農産物を5つ選んで書き入れましょう。

入力欄 ※入力文字は選択欄の文字のとおり入力してください。

① ② ③
④ ⑤

選択欄
オレンジ 大豆 きゅうり 茶 キャベツ
いも類 とうもろこし トマト

間違ったらこの資料を見て正しく直しましょう。

戻る 次へ

中国について学習しましょう。

中国の工業：以前はすべて国が運営していた。

↓

生産の効率が上がらなかった。

なぜか理由を考えて発表しましょう(教科書から探してもよい)

答え(例)：一生懸命働いてもみんな同じ賃金だったので人々の働く意欲が低下したから。

↓

経済を発展させるための対策が行われた。(1978年)

政策：沿海部に をつくりました。

↑

外国の設備や技術を導入するために特別な法律が適用される地域のこと。

戻る 次へ

これは、アジア州の中の中国について復習するための、デジタル自主学習教材の内容の一部を抜き出して提示したものである。このデジタル自主学習教材のポイントは、図やアニメーションを見ながら復習していくという視覚を重視した内容にしているということと、問題を解きながら進めていくということである。解説をずっと見るだけで進めていく方式だと集中力は短時間しか持続できないが、このようにパソコンを操作しながら進めていくインタラクティブ（双方向）な教材だと変化があり、集中力が長く持続できると考えてこのような方式にした。

②確認テスト

上記のデジタル自主学習教材で復習をした後に、学習内容の定着度を測る目的で確認テストを作

成した。しくみとしては、パソコンの画面上に問題が提示され、入力欄に答えを入力するようになっている。そして判定ボタンを押すと、下図のように正解の場合は○印が、不正解の場合は×印が表示されるようになっており、全問題を解答した後は、正解数と正解率が表示されるようにプログラムした。

この確認テストのポイントは3つあり、その1つ目は、やり直しができないように1度判定ボタンを押すと、その判定ボタンが消えるようにしたことである。そうすることで正確な記録として残すことができる。2つ目は、判定ボタンを押して、不正解の場合は×印と同時に正解も表示されることである。解答してから時間が経過すると、どのように思考して間違えたのかを覚えていないことが多いが、すばやく正解を知ることによって、思考の間違いをスムーズに修正することができる。3つ目は、最後に正解数と正解率を自動で計算するようにしたことである。社会科各分野のそれぞれの単元の確認テストを実施した後に、正解率を比較することで単元の学習内容の定着度を自分で把握することができる。そして定着度が低い単元の学習を再度、デジタル自主学習教材で学習すれば効果が上がっていくと考えている。

確認テスト(中国)

1 (1) 中国の正式国名を答えなさい。
 ●

(2) 中国の面積は、960万km²です。これは日本の面積の何倍でしょうか。下から選んで記号で答えなさい。
 (ア 6倍 イ 13倍 ウ 25倍 エ 32倍)
 ●

(3) 中国の面積は、世界第何位ですか。
 位 ●

次へ

➡

確認テスト(中国)

1 (1) 中国の正式国名を答えなさい。
 ○

(2) 中国の面積は、960万km²です。これは日本の面積の何倍でしょうか。下から選んで記号で答えなさい。
 (ア 6倍 イ 13倍 ウ 25倍 エ 32倍)
 ○

(3) 中国の面積は、世界第何位ですか。
 位 ○

次へ

不正解例

↓

確認テスト(中国)

1 (1) 中国の正式国名を答えなさい。
 ×
正解 = 中華人民共和国

(2) 中国の面積は、960万km²です。これは日本の面積の何倍でしょうか。下から選んで記号で答えなさい。
 (ア 6倍 イ 13倍 ウ 25倍 エ 32倍)
 ×
正解 = ウ

(3) 中国の面積は、世界第何位ですか。
 位 ×
正解 = 4

次へ

あなたのテストの結果をお知らせします。
 地理分野(中国の学習)の確認テスト

全29問中で 21 問の正解
 正解率 72 %です。

間違ったところを見直して、
再度挑戦しましょう！！

戻る
判定

確認テストの結果が出た後は、これらを学習の記録として残すために、生徒自らがテスト問題と結果のシートを印刷する。そして教師と生徒がいつでも参考にできるようにファイルに綴じて保管するようにした。

上記①のデジタル自主学習教材と②の確認テストを組み合わせたものを社会科各分野の単元について作成し、それを自主学習システムとして授業実践で使用した。

5 成果と課題

作成した自主学習システムを、ある単元の復習として授業で使用した。生徒の反応は、今までこ

のようなアニメーションや拡大できる写真や地図と連携したイラストなどをパソコン上で操作しながら学習していく方式は経験したことがなかったので、興味津々の様子であった。この教材作成にあたっては、「プログラムの中身は複雑でも、出来上がった教材は誰もが迷わずに使えるものにしたいといけない。」と今までの経験から強く思って作成したので、パソコンの操作についての質問はほとんどなかった。普段からゲームやスマートフォンなどを通して機械に親しんでいる生徒にとって、違和感は少なかったようである。授業後の生徒の感想は、次のようなものであった。

- ・言葉での説明ではわからないところが、アニメーションだとよくわかった。
- ・地図をクリックするとその写真がすぐに見られるのが良い。
- ・戻るボタンがあるので前のページを繰り返し見ることができるのが便利。
- ・音声があって読み上げてくれるのもっと良い。
- ・図がもう少し大きいほうが良い。
- ・パソコンを操作しながら進めていくので画面に集中できる。
- ・答えをすぐに確認できるのが良い。
- ・正解率がでるので自分の力がわかる。
- ・実際のテスト勉強に使える。
- ・他の教科も作ってほしい。
- ・選択問題を増やしてほしい。
- ・記述式の問題もあればいい。
- ・パソコン上に答えを入力していけるのが良い。

概ね良い感想だったので、作成したデジタル教材が生徒の興味関心を高めることはできたと思う。授業時の確認テストでは、約8割の生徒が70%以上の正解率であった。この結果だけみると学力向上に役立ったと考えてもよいと思うが、まだ実施回数が少ないので実施回数を重ねて正解率をグラフ化し、より詳しく分析していきたいと思っている。

今後の課題としては、テスト結果から、より詳しい評価ができるシステムを組み入れることである。各問題を思考判断、知識理解、資料活用の各能力を問う問題に分けて集計し、それぞれの正解率を出すことで、より詳しい評価ができるようになる。そして、その結果から弱点を見つけ、それを克服するためにどのデジタル自主学習教材を再度学習すればよいかを指導する手立てを見つけることができる。そのようなシステムを作り、今後の実践に生かしていこうと思っている。

6 おわりに

本研究は、いいかえれば基礎学力の向上、定着を目指すためにはどうしたらよいかということである。教科の基礎学力が身についてこそ発展的な学習につなげることができる。このことはこれまでの実践で痛感してきたことである。新しく出された学習指導要領には、「主体的・対話的で深い学び」を目指していく必要があるということがいわれている。深い学びを実現していくには基礎学力がなければ難しいことである。また、授業内容に興味関心がなければ授業に集中できず、基礎学力が身につけにくい生徒も多くいるのではないだろうか。そのことを常に意識して授業改善に努めていきたい。

本研究が生徒の興味関心を高め、基礎学力向上に役立つ教材作りの一助になればよいと願っている。

7<参考資料・参考文献>

- ・「教育の情報化に関する手引き」
第3章 初等中等教育における学習指導での ICT 活用 文部科学省
- ・中学校学習指導要領解説の社会編（地理分野） 文部科学省
- ・社会科 中学校の地理 帝国書院 （平成29年）
- ・中学社会 歴史 未来をひらく 教育出版 （平成29年）

誰もが分かる，楽しい授業を目指して ～ I C T の活用と U D を取り入れた授業の工夫～

三好教育研究所 研究員 立花 志津

1 はじめに

平成28年，障害者差別解消法が施行され，すべての国民が障害の有無によって分け隔てられることなく，互いに人格と個性を尊重し支え合うことができる共生社会の実現に向けて，国をあげての取組が始まった。教育においても，多様な子どもの教育に対する合理的な配慮が法的に求められた「インクルーシブ教育システム」の構築を目指している。

「インクルーシブ教育」とは，障害のある子どもを含むすべての子どもに対して，教育的支援を通常学級において行うことをいう。障害の有無にかかわらず，一人一人誰もが違う特性を持っていると考え，それぞれの教育的ニーズに合わせた支援を保障することである。そのためには，教材研究や授業への取組の工夫，授業外の補充指導，支援員の効果的な対応などが，より一層必要になっていく。また，教師の指導も従来の教師主導で押しつけの授業（子どもたちに無理を強いている授業）から，子どもたちの特性や実態に応じたそれぞれの学びを保障できる授業（みんなが参加できる授業）に変えていく必要がある。

すべての子どもたちがともに学習をするなかで，授業内容が分かって学習活動に参加している実感・達成感をもち充実した学校生活をおくり生きる力を身につけていくために，教師は誰もが分かる授業を提供しなくてはならない。

そのために，電子黒板や指導用デジタル教科書等の I C T を活用したり，U D（ユニバーサルデザイン）の考えを取り入れた授業を行ったりと，これまで自分なりに工夫を積んできた。近年，その成果が少しずつ感じられるようになってきた。それは，子どもたちにとって分かる楽しい授業は，教師にとっても楽しい授業になり，それが実感できるようになってきたからである。

教室にいるすべての子どもたちが分かる楽しい授業を目指して，今までの取り組みや，U D を取り入れた授業等についての研究を行いまとめた。

2 内 容

- 1 できないとしかる前に，なぜできないのか，何に困っているのかを考える。
…U D を取り入れた授業を行い，子どもの反応から授業をアセスメントしよう。
- 2 I C T を活用して，50分間を飽きさせない。
…集中が続くのは5分の法則

- 1 できないとしかる前に，なぜできないのか，何に困っているのかを考える。

…U D を取り入れた授業を行い，子どもの反応から授業をアセスメントしよう。

以前は，授業中によそ見をしたり私語をしたりしている子どもたちに，「話を聞きなさい」と注意をし，「あの子は全然話を聞いてない」と愚痴をこぼしていた。あくまでも非は子ども

たちにあるかのごとく「何度言ったら分かるの」と叱っていた。その頃は、子どもたちが本当に分かっているのかどうかは二の次にし、授業を黙って聞いている姿を良しとしていた。

ある時、授業に対するアンケートに、「黒板の字が大きくて見やすい」「ワークを使った復習がいい」「ポイントが分かりやすい」と書かれてあった。子どもたちに褒めてもらおうとうれしくなり、板書や授業の内容を少しずつ工夫するようになった。そうしているうちに、いつのまにか授業中の注意や叱責をする必要がなくなっていた。

教室にいる子どもたちの学びには、一人一人に違いがある。その違いを見つけ必要な手立てを打つことが学びの保障である。話を聞いただけで理解できる子もいれば、それだけでは理解できにくい子や、イメージすることが得意な子もいれば、そうではない子もいる。特別な支援を必要とされていない子どもたちの中にも、学びにくさを抱いていて本当は困っていることを隠している子もいる。本当は分かっているのに、分かったふりをしている子も大勢いる。中学3年生にもなると、「どうせ」と投げやりになっていることもある。

一斉授業の中では、一人一人の学びにくさに対して特別に対応することが、難しいように感じた。それは、対応が極端すぎると、ある子にとってプラスにはたらくことも、別の子にとってはマイナスにはたらくことがあるからである。例えば、問題を解くのに時間がかかる子もいれば、さっと仕上げてしまう子もいる。時間を長くすると十分に考える時間を与えることができるが、さっとできる子にとっては、退屈な時間を与えてしまうことになる。そこで、誰にでも分かる授業をつくるためにユニバーサルデザイン（UD）の考えを取り入れた。

(1) つまづきを想定した授業を行う。「聞くだけの時間」を減らす。

一斉授業の中で、最も子どもたちが興味を失い離れて行く時間は、教師の話を「聞くだけの時間」だと思う。姿勢が徐々に崩れていく子や、視線が窓の方を向く子が現れる。

そこで「話を聞くだけの時間」を減らすために、授業のUD化のキーワードである「焦点化」「視覚化」「共有化」を取り入れることで改善を図った。また、見通しがもて安心して授業が受けられるようにパターン化した流れで授業を行った。

- 「**焦点化**」その時間のねらいをきちんと絞り、そのねらいに向かった授業を行う。

「**視覚化**」イラストや写真、動画等を用いて聴覚だけでなく視覚に訴えた授業を行う。

「**共有化**」ペア学習や班学習を使って、考えを共有したり思考をそろえたりする。

基本的な授業の流れ（パターン化）

生徒の活動		UDを取り入れた指導の工夫
小テスト		「焦点化」 「スモールステップ」
導入	前時の復習（必要に応じて） クローズドクエスチョンで全員発表 ペア学習 写真や動画を使つての導入 必要な部分のみを取り上げた写真や動画	「共有化」 「共有化」 「視覚化」 「焦点化」
ねらいの把握	ノートに書く	「焦点化」「共有化」
山場	写真や動画を使って説明 オープンクエスチョン 考える時間（ペア学習、班学習） 理解する時間	「視覚化」 「共有化」 「スモールステップ」

	納得する時間 ノートにまとめる	「スモールステップ」 「焦点化」
理解をそろえる	練習問題 班単位で発表 クローズドクエスチョンで全員発表 小テストの課題把握	「共有化」 「共有化」 「焦点化」

(2) 導入を工夫する。

- ・実物を見せる，触らせる，においを嗅がせる。（実物や実体験に勝るものはない）
- ・写真や動画を見せる。（視覚化して思考しやすくする）
- ・写真や動画の一部を隠して見せる。（焦点化，見るべきところがよく分かる）
- ・写真や動画を一瞬だけ見せる。（チラ見せ）
- ・写真や動画のまちがいを探させる。
- ・子どもたちが確実に知っていることから，話を膨らませる。「これ，何だろう？」「どうして，こうなるのかな？」「じゃあこれは何？」「ここがこうだったら，どうなる？」
- ・子どもたち全員が知らないことから入る。（全員が知らないことで，分からない子が安心して学習できる）
- ・授業の山場で答えが分かるように，子どもたちの中に？を増やしておく。そうすることで子どもたちの授業への取り組みが変わる。分かったという実感をもたせやすい。

(3) 発問や発表の仕方を工夫する。

- ・授業に参加していることを実感させるために，一人一回は必ず発言等を行う機会を設ける。
- ・発問は明確に，できるだけ，ワンセンテンスにする。（焦点化）
- ・先に発言した子につながる発問を行い，パターン化しておく。（他の子の発言をよく聞くようになる）
- ・穴埋め問題等の場合は，発言を聞いて書き込む時間を設定する。一問一問の間に書く時間を取る。ある程度進んだ段階で全員がそこまで記入ができているのか，隣どうしや班で確認し合う。（全員の進度をそろえる）
- ・○×や選択肢がある場合は，○×カードや，A～D等の選択肢が書かれたカード（色紙でもよい）等を全員分用意しておき，全員が意思表示できるようにする。全員が参加でき，カードの提示によって子どもたちの理解度の評価も一目でできる。カードを作る手間は一度だけで，何度も使用できるので便利である。子どもたちにも好評である。
- ・I C Tを活用する。（詳細は2）
- ・発表者が答えられないことをできるだけ回避するために，ヒントを用意する。まちがってもよいと伝えていたとしても，みんなの前で間違えることを恥ずかしいと思う子もいる。明らかに正解と分かっているものに対しては，安心して自信をもって発言できる。また，小さな声で隣の人にアドバイスをもらうのもよしとする。
- ・前の席から順に指名していく。自分が発表する順番があらかじめ予測できるので，答える準備ができ発表しやすい。確実に全員に回っていくので，一緒に学んでいるという感覚ももたせやすい。
- ・座ってばかりだと集中も続きにくいので，全員起立させ，答えたら座らせるというようなことも取り入れる。個人でもいいし，ペアで行ってもよい。結構盛り上がる場面である。

- ・予想もしない発言や間違った答えが帰ってきた時こそチャンスにする。「そこに気づく」「なかなか鋭い」「惜しい」など瞬時にほめる。どんな答えであっても（真剣に考えて出したものなら）認めてもらえれば、子どもたちも発言しやすくなる。発言を肯定すると子どもは自分の発言が授業に貢献できたという感覚が持てる。
- ・発展的な、あるいは難度の高い問題では、ペア学習や班学習を活用する。
- ・人前で話すことの不安から発表することが難しい場合は、安心して発表できるように、ノートやワークシートを見ながら発表できるようにするなどの配慮をする。また、解答を選択型にしたり、班での役割分担にしたりすることで発表しやすくなる。

(4) 集中しやすい環境をつくる。(合理的配慮)

「場の構造化」 「刺激量の調節」 「ルールの明確化」 「相互理解」

発達障害のある子どもたちに合わせた環境をつくることによって、教室にいる誰もが安心して集中できる学習環境をつくる。

「場の構造化」

整理整頓された教室は、何処に何があるのか一目で分かり、そのことによって様々な学習活動を効率よく行うことができる。誰でも持ち物の整理をしやすい。

「刺激量の調節」

黒板周りから、授業に関係のないものを極力見えないようにする。カラフルな掲示物があると、ついついそちらに目が向いてしまう。子どもたちの中にはごちゃごちゃしているものの中から必要な情報だけを取り出すのが苦手な子もいる。同様に、窓からいろいろなものが見える場合(グラウンドでしている体育の授業等)はカーテン等で遮る。授業中に視界に入るものは、授業に必要なものだけに(焦点化)するのが良い。

工事中の音のように、音の刺激も集中の妨げになってしまう。窓を閉める、カーテンを引くなどの工夫を行う。ギシギシ鳴る机や椅子も緩衝材等を用いて対処する。聴覚刺激に敏感な子どもに対する配慮は、すべての子どもたちが授業に集中しやすい環境作りにつながる。

「ルールの明確化」

あたりまえのことや、暗黙のルールを理解しにくい子どももいる。そのために、中学生なら理解していてあたりまえのような暗黙のルールをなくして、ルールを明確にした。最初の授業で、子どもたちとルールを確認し合った。普通教室での授業では、次のルールを設けた。(理科室では、理科室のルールを作った)

- ① 教科書等の準備は、チャイムの前にする。(行動の切り替えがしやすくなる)
- ② あいさつは、語先後礼で行う。
- ③ 忘れ物をした場合には、授業の前に申し出る。
- ④ 話は、顔を見て聞く。

ルールが守れるようになるまで、辛抱強く取り組んだ。教師がルールを大切にしないと、子どもたちもルールを守らなくてもよいと思うようになる。②のあいさつは、全員がそろってできるようになるまで、ルールの確認をその都度行なった。全員がきちんとできた時は「今日もいいあいさつですね」「かっこいいなあ」と一言伝える。「今日は」じゃなく「今日も」と言うことが大事である。ルールといっても毎日毎時間繰り返していると(またかと思われながらも)、それは習慣となり気負わず自然にできるようになっていく。あいさつが気持ちいいと褒めることから授業がスタートすることになるので、その点から見ても都合が良い。

話を聞く態度が良い場合も、一言褒めてから話を進めることができるからお互いの気分が良い。一人でも顔が上がってないときは、話を始めなかったり、「一人聞いてない人がいる」と言って話を中断したりする方法も使った。①や②のルールは、子どもたちの気持ちを切り替えて次の行動に移すという役割も担っている。

「相互理解」

どんな学習活動も教師と子どもたちとの人間関係、子ども同士の人間関係が良好でないとうまくいかない。逆に人間関係が良ければさらに良い授業、分かる楽しい授業をつくることにつながっていく。分からないときに分からないと誰もが安心して言える雰囲気大切である。たとえ間違ったり失敗したときでも、周りから温かい笑いや励ましの声が出る教室、時には厳しい言葉が出ながら互いに支え合うことができる教室があるとよい。ペア学習も班活動も人間関係が良好であってこそ効果がある。特定の誰かではなく、誰もが活躍できる場面や助け合う場面を設定し、互いを認め合わせることが重要である。

授業中の教師の発する言葉には大きな影響がある。「こんなことも分からないの」「また、忘れた」「まだ、できないの」「あなただけでできてない」など、この言葉を受けた子は嫌な思いをしたりやる気をなくしたりする。中にはできていない自分自身をだめな人間だと思ひこんでしまう子もいる。それだけでなくそれを聞いた周りの子にも「〇〇さんは、悪い子、できない子、自分より劣る」というような印象を植え付ける恐れもある。良いところを認め褒め、できていないところはできるように支援をしていく教師の姿勢が、支援の必要な子どもたちとの関わり方の手本になる。子どもたちは見ていないようでいろいろなことをよく見ている。いい手本でありたい。

(5) 考えるための技法と視覚化

抽象的な情報を扱うことが苦手な子にとっては、ワークシートを利用したり、事柄を一つずつカードや付箋紙に書き出したりすること（視覚化）で思考がしやすくなる。ホワイトボードミーティングや、ある事柄を中央に置き関連のある言葉を次々に書き出し線でつないでいく方法（いわゆるウェビング）も思考を広げていくのに役立つ。そのうえ、ペア学習や班活動で協働的な学習、対話的な学習がしやすくなる。また、思考の過程を一目で見ることができるので、その場で教師が助言を行ったり、子どもたち自身が探求の過程を振り返ったりすることに活用できる。

「考えるための技法」（中学校学習指導要領解説より）

順序づけ	複数の対象について、ある視点や条件に沿って対象を並び替える。
比較	複数の対象について、ある視点から共通点や相違点を明らかにする。
分類	複数の対象について、ある視点から共通点のあるものをまとめる。
関連付け	複数の対象がどのような関係にあるかを見付ける。 ある対象に関係するものを見付けて増やしていく。
多面的・多角的	対象のもつ複数の性質に着目したり、対象を異なる複数の角度から捉えたりする。
理由付け	対象の理由や原因、根拠を見付けたり予想したりする。
見通す	見通しを立てる。物事の結果を予想する。
具体化 （個別化・分解）	対象に関する上位概念・規則に当てはまる具体例を挙げたり、対象を構成する下位概念や要素に分けたりする。
構造化	考えを構造的（網構造・層構造など）に整理する。

(6) 小テストの活用（スモールステップ）

学習の苦手な子どもにとって、定期テストで本人が満足のいく点数をとるのはハードルが高い。テスト勉強をしようにも、教科書のどの部分を覚えたらよいのかさえ分からない。埋まらない答案用紙を見て自分は勉強ができないと落ち込んだり、投げやりな気持ちになったりする。

しかし、小テストならばクラスの全員が全問正解することも可能であるし、そのことによって学習意欲や自己肯定感を高めることができる。そのための工夫として、

- ・毎時間、授業の始めに全員合格をめざした小テストを行う。（習慣化：学習の習慣化）
- ・授業のまとめの部分で、次の小テストに出る部分を知らせる。色ペンで囲む等、全員に覚えるところを認知させる。（焦点化：学習する部分がピンポイントで分かる）
- ・内容によっては、文を暗記させる。（穴あきや例文：（ ）をうめたり、例文を参考にする）ことで、少しの努力さえすれば誰もが満点をとれるものにする）
- ・毎回、記録をとる。記録した表はオープンにする。（連続合格していることなどを自分で確認できる）
- ・小テストに時間（教師の手間もテスト時間も）をかけない。始業前に用紙を配布し、チャイムでスタート。時間は2～5分までとする。それ以上時間をかけると、問題が余裕で解ける子と、全く解けない子の両方に退屈する時間ができる。毎回、凝った小テストを準備していると教師も疲れる。ちょっと頑張ればできるテストを毎時間行うことが大切である。
- ・合格点に満たない子に対しては、休み時間や放課後を利用して再テストや課題学習を行う。成績が悪い子も勉強ができるようになりたいという気持ちを持っているが、自分からは言い出しにくいこともある。教師から強制してやれば、やる気のある生徒が放課後に学校に残りやすくなる。（個別の支援）
- ・入試対策の小テストで、どうしても一日では覚えきれない場合は、早い時期にテスト内容を知らせ準備をさせるなど本人の希望に即して行う。その際、全員に「次のテストの内容は難しいから早めに勉強にかかりたい人は？」と、声かけをして自分だけという思いをさせないようにする。（個別の配慮）

定期テストでは、なかなか点数が取れなくても、この小テストなら全問正解の日数を重ねることができ、それが笑顔を生む。特に支援が必要な子どもたちにとって、周りの生徒と同じテストで合格するという喜びにつながるし、次も頑張ろうという励みにもつながる。

(7) よく見られる困り感への対応

① 板書を写さない（写せない）

- ・視力の問題、見え方等の読字障害が原因なら座席を配慮したり電子黒板を用いて拡大したりする。時間の問題ならば、コピーや写真、友達のノートを見て写す。（後でノートに書けたかどうかを必ず確認する）など、できないことがあるのならそれを補う支援を考える。
- ・図を写す場合や後から追記する場合は、電子黒板のノートモード（ノートのように罫線がある）を使って、「ノートの端から端まで15行使ってこの図を書く」「2行目から書いて、この部分は後から書くから空けておく」というように具体的に書き方を示す。図の場合小さく書きすぎて図の中に追記ができないことや、逆に大きすぎて他のことを書くスペースがないことがある。また、追記があることを知らせておくことは、後からおこる困り感を減らすことにつながる。きちんと書けたノートは子どもの達成感や、教師が子どもを褒めるチャン

スにつながる。「きれいに書いてるなあ」と伝えと、次回からもっときれいなノートを書く子が確実にでてくる。

- ・使用するチョークに意味をもたせる。色覚に何らかの異常がみられる子もいる。蛍光塗料の入った発色の良いものは今までの色チョークに比べるとずいぶんと見やすくなっている。最初の授業の中で、一番よく見える色を子どもたちと確認し合う。その色を重要な語句や文に用いるなど、チョークの色と使う用途を互いに共通理解しておく。子どもたちは、教師が使った色と同じ色ペンでノートに書く場合があるので、ノートに書く場合は赤ペン、青ペンなどを使うなどのルールも決めておく。そうでないと、蛍光のオレンジを使うと蛍光ペンでノートに記入する子がいて、かえって読みにくいノートができる。

- ・板書を写したり、ノートに記入したりする量を適切にする。(図や余白を入れて1時間の授業で1ページまでとした)

② 指示を聞いてない(聞けない)

自閉スペクトラム症やADHDなどの発達障害の場合がある。できるだけ、簡潔に話す。目からの情報が入りやすいので、絵や写真、動画などを併用する。重要な部分は板書をし、ノートに書かせる。少人数の方が理解しやすいこともあるので、ペア学習や班学習で内容を確認したり覚えあったりする。話を聞かずにしゃべる子には、あえて簡単な質問をして、みんなの前で説明をしてもらう。しゃべることが得意なので、得意なことを生かす場面をつくる。(みんなの前で説明をしたくない場合には、おしゃべりが減っていくという効果もある)

③ 宿題を提出しない(提出できない)

- ・宿題の内容が適切かどうかを考える。単語を何回か書いてくるとか、調べたら答えが必ず分かるような宿題ならば誰でも取り組みやすい。考えないとできないものは、やりたくてもできない子がいる。

- ・宿題があることを忘れていることもあるので、そのことに気付かせる工夫をする。忘れないためにはどうするかを本人と話し合って決める。

- ・個人でできないのなら、放課後や休み時間を使って一緒にする。50分の授業の中で余裕がある場合には、全員に課題をする時間を設定する。宿題が提出できたかどうか必ずチェックをする。チェック表はオープンにすることで、宿題をきちんと出せているという達成感を与えることができる。

④ 進み具合に差が起こる

練習問題を解く場合、それに費やす時間に個人差が出てくる。適切な時間設定も必要であるが、全員が十分に考える時間を与えたい。しかし、時折早くできて退屈する子やおしゃべりを始める子が現れる。それを防ぐために、全員が取り組む問題とプラスアルファの問題を必ず用意しておき、授業中はしっかり学習に取り組めるようにする。課題を始めるときに「早くできた子は、ワークブックの問題をする」というように伝えておく。始めに伝えておくことでスムーズに次の課題に進むことができる。このとき、何の何ページという部分を聞き逃す子もいるので、黒板に①教科書 p 14 の問 3 → ②ワーク p 5 というように明示する。また、「近くの席の子や班の子どうして教え合いしてもいい」と協働で学べる班活動を活用するのも良い。班の中で競争して取り組むこともある。

(8) 授業をアセスメントしよう

これまでは、自分が学生の頃に受けてきたような授業(子どもの声よりも教師の声の方が多

い教師主体の授業、子どもに無理を強いる授業)をしてきたが、これからは、「多様な子どもたちがいることを前提とした授業」、「学びたいという気持ちを尊重する授業」、「正解を出し合う授業から、分からないことや誤答からはじまる授業」、「みんなで考えたり作り出したりする授業」など、子どもたちが主体的に学べる場をつくる授業設計をしなければならない。

また、子どもの様子を見て、その授業内容や指導の方法を振り返ることが大切である。このクラスでうまくいった授業も違うクラスではうまくいかないこともある。また、1時間の授業の中でも、子どもたちの反応を見ながら予定を変更していく必要がある。臨機応変に授業を変えられるように、つまずきを想定した教材研究をしておかなければならない。

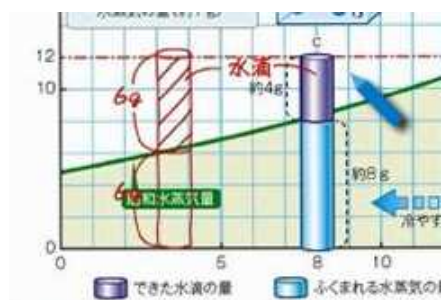
子どもたちは基本的に素直であり、学びたい分かりたいと思っている。分かりやすい授業をすれば、共に学んでくれるし、得意な場面では、誰でも顔を上げ意欲を見せてくれる。困っているのは教師ではなく、子どもたちの方だと考え、教える側でなく学んでいる子どもの側から授業を見直していくことが大切である。

2 ICTを活用して、50分間を飽きさせない。…集中が続くのは5分の法則

(1) 指導者用デジタル教科書や電子黒板の活用

① 拡大機能とドロー機能

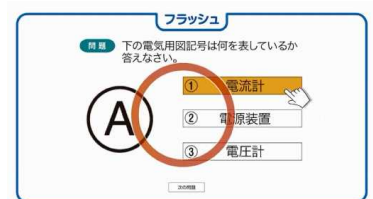
拡大機能は文字通り見せたいところを拡大して提示する方法である。一瞬で一番後ろの席の子にも見えるサイズにできる。以前は教科書を開けさせ説明をしていたが、教師の指示が通りにくい子や動作に時間がかかる子には十分な指導はできていなかった。拡大機能を使うことで子どもたちも自分の教科書のどの部分の説明かということがよく分かり学習内容を把握しやすくなった。



ドロー機能とは線や文字を書くことのできる機能である。拡大機能によって大きくした図を利用して説明を書き加えたり、本文の重要な部分を線で囲みノートに書き写したりできる。また、発表にも利用できる。今まで板書に費やしていた時間を、子どもたちがノートに書き写す間に、机間巡視を行い一人一人の様子を見て回ることができるし、発表に使うとスクリーン上に自分の書いた文字や図が映るので学習へのテンションも上がりやすい。

② フラッシュカードと○×クイズ

右図のような化学式のフラッシュカードは時間を設定できるので、一人ずつ正解を答えられたら着席できるという約束のもと順に答えさせるのもよい。フラッシュカードの問題は自動に更新するのでその間、教師は子どもの様子を観察できるし、苦手な子のためのヒントを与えられる。ヒントは大きな声で言う(みんなに伝える)方が子どもの不満が少ない。全員が答えられるまで周りの応援もあって教室全体が盛り上がる。問題の難易度がアトラダムなものいい。その単元が苦手な子に簡単な問題が当たったり(子どもはラッキーと喜ぶ)、得意な子に難しい問題が当たり答えられなかったり、



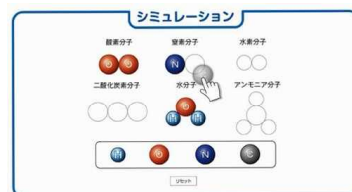
勉強のよくできる子もそうでない子も楽しく参加できる。復習や導入としてフラッシュカードを活用するのも効果的である。ただ、ネットワークの環境の影響で、音が再生できないため、正解時の「ピンポン」が聞こえなかったことが残念である。

③ 動画とシミュレーション

これは、1年生で学ぶガスバーナーの説明と使い方の動画である。以前は、黒板にガスバーナーの図を書いて使い方を説明した後演示実験を行い、その後実際のガスバーナーを使って使い方を学ばせた。しかし、黒板に書いたガスバーナーの図はリアリティーに欠けるし、時間もかかる。また、演示実験も全員にはきちんと伝わっていないように感じていた。そこで、書画カメラで演示の様子を拡大して見せるなどの工夫をしていたが、決定打にはならなかった。自分が演示をしているときには演示と説明をすることで手いっぱいになっていたが、この動画を大画面で見せるとその間に、子どもたちの様子を観察することができる。集中できていない子に声をかけることもできる。操作方法に自信のない子は何度も動画を見て練習ができるので、理解不十分が元であきらめて学習意欲をなくすようなことも少なくなった。



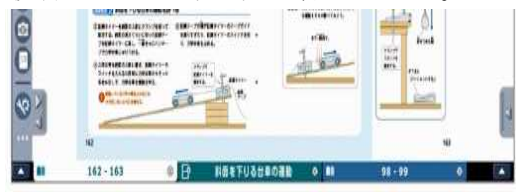
シミュレーションも実際に動かすことができるので楽しみながら学習できる。化学式や原子を苦手な子も多いが自分で操作して繰り返し学習することができたり、飽和水蒸気量の学習など抽象的で分かりにくい分野をこうしてゲーム的に学べたりするところが子どもたちにも好評である。



④ タブ切り替え機能と2画面表示機能

タブ切り替え機能は、教科書画面、コンテンツを素早く切り替える機能である。複数のタブによって必要なページやコンテンツ、他学年や他教科のページ等に切り替えられる。

2画面表示機能は、複数のタブの中から2つを選んで並べて表示できる機能である。異なる学年や理科と数学といった異なる教科書も並べることができる。3年生の物体の運動の学習は、数学の二次関数とつながっている。力の平行四辺形の法則の学習は、数学の平行四辺形の学習とつながっている。単一の教科だけでなく、いろいろな教科の学習が関連していることを実感させることにも役立つ。



⑤ 教材作成機能

例えば、小テストや自分で撮影した写真を入れてオリジナルの画面を作ることできる。作成したものは保存ができ、いつでも利用できる。

理科の学習ではグラフを書いたり読んだりする学習が多いが、指導者用デジタル教科書に入っているものでは少し使いづらかったので自作したものを保存しいつでも利用できるようにしていた。また、定期テストの復習でも自作のテストを読み込み復習を行った。(電子黒板でもできるが、電子黒板は背面と書いた文字が同時に動かないので不便な時がある) キャンバスはホワイトボードと同じような役割を持ち、授業の最後にまとめや確認として記入したものを保存し、次の時



間に復習に使ったり、何クラスも同じ授業をする場合に、繰り返し利用することができる。

⑥ 指導者用デジタル教科書と電子黒板

指導者用デジタル教科書は、電子黒板とセットにすることで大きな効果を得ることができる。電子黒板ではなくパソコンをモニターに繋いで指導者用デジタル教科書を利用することも、もちろんできる。しかし、その場合、パソコンの画面を見て操作をすることが必要といった欠点がある。(その間子どもたちの顔は見えない) その点、電子黒板があれば、電子ペンがマウスの代わりとなって画面操作ができるので、教師は子どもたちの反応を見ながら授業をすすめることができる。タブレットのように画面操作できる大型モニターがあれば一番よい。また、デジタル教科書がない場合、電子黒板だけでも自作テストやプリントを拡大し学習することもできるのでとても便利である。

指導者用デジタル教科書には、様々な機能が搭載されており、そのすべてを自由自在に活用するまでには至っていない。すべてのページを開き、どんなコンテンツにつながれているのかを確かめ動かしてみる必要がある。学校の忙しい現場で教材研究の時間がなかなか取れない現状でも、パソコン操作の苦手な方も、一度動かしてみることで、便利なところや子どもたちが楽しんで学習するものを発見できるので、ぜひ活用してほしい。電子黒板と指導者用デジタル教科書のない学校に勤務することになったら・・・と考えるだけで不安である。

(2) ウェブサイトの利用

教室がネットワークに組み込まれているならば、「Yahoo」や「Google」などの検索エンジンや、動画配信などを利用し、必要な情報を即座に子どもたちに提供することができる。これは、子どもたちの興味関心を深め、学習意欲を高めるのに有効である。その中でもよく利用しているのが、「NHK for school」である。たくさんの動画があり、ここぞという場面だけを見せることや、関連事項を続けて見せることもできる。内容も教科書にそっているので必要な動画を探しやすい。すべての学年、すべての教科に対応しているところと、何より自由に使えるところがよい。デジタル教科書にも動画は組み込まれているが、それでは少し説明が足りないときや、内容が子どもたちの関心を引きにくいときに役立つ。

天体の学習での惑星や恒星のようすや動きなど、実際に見て触れることのできないものを動画で見せると、学習が苦手な子どもたちも映像に惹かれ熱心に学ぶことができた。ただ、どんなに内容がよくても時間の長いものは集中力が続かない子が現れる。事前に、どの部分を取り入れるか、どのタイミング(導入、核心、まとめ、復習、予告)で見せるのがより効果的なのか考えて組み込まなければならない。

(3) タブレットの活用

子どもたちの多くはスマートフォンやタブレット等を普段から利用している。検索をかけるだけで、必要な情報をすぐ手に入れることができる。アルファベット入力が出来なくても、漢字が書けなくても、音声入力によって検索も可能である。まだ、勤務校ではタブレットの利用ができない環境だったので、残念なことに一斉授業の中で活用した経験がない。電子黒板や指導用デジタル教科書に関しては、教師がほぼ主導権を握っている。それに対してタブレットは、学習の主体が子どもになり生き生きと学習に取り組むことができると思う。

また、黒板の文字が見えにくい子に、板書をタブレットのカメラ機能で写し拡大したものを見せたり、文字の読解が苦手な子にルビ付きの資料や音声機能を利用したりと支援ツールとしても有効である。

(4) ICTの活用の効果と課題

ICTの活用によって、講義式の聞くだけの授業から、色彩や動きのある目で見て楽しい授業やゲーム感覚で楽しく参加できる授業への変換ができた。また、余剰時間を子どもの行動観察や支援に回すことができ、教師は子どもたちのつまずきの部分にすぐに対応することができる。板書に費やす時間が少なくなるため教師も子どもも顔を見ながら学ぶ時間が多くなる。そのうえ、インターネットを活用すると、教師が想定しない子どもたちの疑問に対する答えを素早く提供することもできる。

授業の中にうまくICTを取り入れるためには、子どもたちにどのような力をつけていくか、そのためにどのような授業をしていくかを考え、1時間1時間の授業研究に取り組まなければならない。
(写真引用 指導者用デジタル教科書 啓林館中学校理科1～3年)

3 おわりに

教員になり数十年が過ぎ、中学生だったかつての教え子たちも父や母になり、社会人として立派に成長している。その姿を見てから、すべての子どもには無限の可能性があると感じることができるようになった。若い頃は目の前の子どもたちの姿しか見えず、決めつけた教育しかできていなかったと今さらながらに思う。すべての子どもの可能性を信じ伸ばすことができる場を提供するように努めなければならない。

安富 歩(東京大学教授)さんのインタビュー記事の中に、次のような文章があった。

・学校におけるいじめが絶えませんが、子どもにも憎悪の蓄積があるということでしょうか。
「もちろん、そうです。学校には3つの機能があります。劣等感を押しつける機能、知識に対する好奇心や意欲を打ち砕く機能、黙っておとなしく座っていることを叩きこむ機能です。それは教科書を見ればわかります。例えば中学校の理科ではニュートン力学の話、熱力学の話、気象の話などが混在しています。ニュートン力学には時間の反転対称性がありますが、熱力学にはそれがないように、前提条件が全然違うものを一緒に提示されて、子どもに理解しろと言う方がおかしい。しかも学習の進度という奇妙なことを考えながら一律に教えていくわけです。多くの子どもたちは教わることの意味が分からないまま、それを飲み込んでいきます。これでは意欲を失い、理解できない自分が悪いという劣等感が積み重なります。成績のよい子はいませんが、それは教師が正解とする答えを書いているだけです。自分自身への嫌悪感に耐えられなくなったとき他人に憎悪を向けるというのが人間の性なのでしょう」

これを読んだ時、「えっ、何」と不快感を抱きながらも、確かに…と納得し戒められた。心して取り組まなければならない。

(総合教育技術 2017年7月号 巻頭インタビューより抜粋)

参考文献

中学校学習指導要領(平成29年告示)解説(文部科学省)、教育支援資料(文部科学省)
総合教育技術 2014.09 2016.02 2016.07 2017.01 2017.07 2018.02(小学館)
通常学級のユニバーサルデザイン プランZero2 授業編 (東洋館出版社)
授業のユニバーサルデザイン入門 どの子も楽しく「わかる・できる」授業のつくり方(東洋館出版社)
授業のユニバーサルデザイン Vol. 7, Vol. 8(東洋館出版社)

既刊「研究紀要」の内容一覧（平成元年～）

集	年 度 (平成)	内 容
30	元	園外の地域環境を生かし、幼児の主体性を育てるための活動は、どのようにすればよいか 幼稚園第2ブロック共同研究 小規模校の特性を生かし、児童一人一人に応じた指導をめざして ー学校・家庭・地域が一体となってー 池田町 下野呂内小学校 「子どもが生き生きと取り組む、豊かな教育活動」 ーふるさと意識を高めるためにー 山城町 山城小学校 明日を担う心豊かで自主性のある生徒の育成 ーボランティア活動を通してー 井川町 井川中学校 へき地の特性を生かし、一人一人がたくましく伸びる魅力ある学校の創造 ー同单元類似内容の指導の試みー 池田町 出合小学校 郡内家出少女についての考察 三好郡青少年育成センター 久原 啓治 樹木画に見られる心の世界Ⅱ ー児童・生徒の理解と援助のためにー 三好郡教育研究所員 入江 宏明
31	2	ふるさとの活性化をになう子どもたちの自発性をほりおこすために 西祖谷山村 善徳小学校 教諭 徳善 之浩 体験を通して豊かな心を育て、実践まで高める道德教育 三加茂町 三庄小学校 教諭 吉田美千代 一人一人が主体的に取り組む、活力ある生徒の育成をめざして 池田町 池田第一中学校 教諭 小島 治子 西字小学校における生活科年間計画 ー平成4年度教育課程完全実施へ向けての新しい試みー 山城町 西字小学校 教諭 内田三千代 英語指導助手（AET）とのティーム・ティーチングを通して ーコミュニケーション能力の育成のためにー 池田町 池田中学校 教諭 木藤 康子
32	3	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー人とのかかわりをとおしてー 第3ブロック幼稚園 池田町 川崎幼稚園 教諭 林 節子 馬場幼稚園 教諭 丸岡 明美 西山幼稚園 教諭 東川たつ子 子どもが主体的に取り組む特別活動 ーたて割り班の活動を通してー 井川町 井内小学校 教諭 立川 義輝 自らが心身ともに健康な体づくりに取り組む児童の育成 ー進んでむし歯予防に取り組む白地っ子を目指してー 池田町 白地小学校 養護教諭 平田志津子 生徒が生き生きと活動するための手立てはどのようなであればよいか ー学校行事などの活動を通してー 山城町 山城中学校 教諭 佐藤英一郎 一人ひとりを生かす評価活動 ー学習意欲を高める理科の指導ー 三好郡教育研究所員 藤本 智恵
33	4	主体性を伸ばし、実践力を育てる特別活動 ー個性を重視した、たて割りグループによる児童集会活動を通してー 山城町 大野小学校 教諭 上田 優 へき地小学校における性教育についての研究 ー性教育の実践を通してー 東祖谷山村性教育研究会 和田小学校 教諭 松村 直也 ふるさとを愛する心の育成を目指して ー体験的活動を通してー 西祖谷山村 西祖谷中学校 教諭 篠原 一仁 中学校国語科書写における行書指導 ー行書を活用した筆写活動の日常化をめざしてー 三好郡教育研究所 研究員 岸 敬子

集	年 度 (平成)	内 容
34	5	健康でたくましい子どもの育成をめざして ー主体的に取り組む活動ー 第3ブロック幼稚園 教諭 上林加津子 永田 協子 自然に感動し、主体的に学び続ける児童の育成 ー一人一人の表現活動を高め、科学的な見方や考え方を育てる理科学習ー 三野町 王地小学校 教諭 安西 政和 自ら学び、自らきたえる心豊かな子どもの育成 ーボランティア活動をととしてー 三好町 昼間小学校 教諭 武岡 澄代 奉仕等体験学習を通して、思いやりのある心豊かな生徒の育成 池田町 池田中学校 教諭 古林 久代 英語指導を通して平和教育をすすめるー私案 ーピース・メッセージの実践を通してー 三好郡教育研究所 研究員 長谷 郁代
35	6	地域に開かれた学校づくり ーすこやかな児童の育成をめざした、地域ぐるみで取り組む学校行事ー 山城町 大和小学校 教諭 久保 満男 小規模校における環境教育の取り組み ー教科、特別活動の実践を通してー 池田町 馬路小学校 教諭 細川 敬雄 地域とともにあゆむ生徒の育成をめざして 三好町 三好中学校 教諭 玉木 利典 選択履修の幅の拡大 ー家庭科ー 三好郡教育研究所 研究員 佐々木待子
36	7	主体的な生活を促す幼稚園教育 ー幼児が自分らしさを発揮して生活する環境と援助を考えるー 第4ブロック幼稚園 山城幼稚園 蔵下美千子 思いやりのある心豊かな児童の育成をめざして ー「いじめ」を許さない学校づくりへの取り組みー 三加茂町 加茂小学校 教諭 小笠 健二 「郷土を愛し、心豊かな児童の育成を目指して」 ー体験学習・ボランティア活動を通してー 西祖谷山村 吾橋小学校 教諭 濱口 久弥 生徒会活動の活性化をめざして ー自ら考え、行動する生徒会活動への教師の支援ー 三加茂町 三加茂中学校 教諭 山西 敏広 生活に生きる書写力の育成を目指してー中学1年生への意識調査と実践例ー 三好郡教育研究所 研究員 栗田 典子
37	8	地域に根ざした福祉・ボランティア教育 ー施設訪問を通してー 井川町 辻小学校 細川 文男 『ふるさとを愛し、人間として主体的に生きる生徒の育成』 山城町 大野中学校 小学校国語の文法的事項の指導 ー「何について」「どのように」「どこまで」指導するかー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代

集	年 度 (平成)	内 容
38	9	幼稚園において、幼児の興味や欲求に応じ、幼児とともに充実した生活をつくりだすためには、環境をどのように構成すればよいか 第1ブロック幼稚園 教諭 宮成 典子 物やお金を大切にし、思いやりのある豊かな心を持つ児童の育成 池田町 三縄小学校 教諭 森本 明子 環境教育 Think Globally, Act Locally を目指して ー積極的に環境と関わり、責任ある行動がとれる生徒の育成ー 三野町 三野中学校 教諭 丸岡 美枝 学校不適応問題の諸相と教師の援助について 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子 学級担任の教師が行う教育相談 ーある不登校児とのかかわりを通してー 三好郡教育研究所 研究員 吉田美千代
39	10	身近な環境に意欲的にかかわり、よりよい環境づくりや環境保全に配慮した望ましい行動がとれる児童の育成 山城町 政友小学校 教諭 大西公美子 一人一人の個性を尊重し、豊かな心と、『生きる力』を育むために ー地域に育てられ、地域と共に伸びる生徒の育成ー 東祖谷山村 東祖谷中学校 教諭 梶原真里子 今、子どもたちの心は？ ー三好郡内小中学生意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 吉岡 弘恵 三好郡教育研究所 研究員 山田恵美子
40	11	魅力ある幼稚園教育の創造（三好町三園の取り組み） ー生活体験や自然体験を通しての生きる力の育成ー 三好町内幼稚園 ふるさとに立ち、たくましく生きる力をもつ、心豊かな子どもの育成 ー名頃を見つめ、名頃を愛する学習を通してー 東祖谷山村 名頃小学校 教諭 橋本 隆 「人権感覚豊かな心」と「共に生きる力」を育む教育の創造 ー「選択の時間」を生かした取り組みの中でー 井川町 井川中学校 教諭 内田 典善 授業の効果を高めるためのコンピュータ利用のあり方 三好郡教育研究所研究員 西井川小学校 吉岡 弘恵 英語科においてコミュニケーション能力を育成するために 三好郡教育研究所研究員 三好中学校 新居 信子
41	12	「ひと・もの・こと」とのかかわりを通して、生きる力を育む王地学習 王地小学校 教諭 北川ひとみ 自ら学び、自ら考え、主体的に行動する生徒の育成 ー地域の特性を生かした取り組みの中でー 池田第一中学校 教諭 立花 久 三好郡における情報教育の現状とその考察 ー郡内小中学生・教職員の意識調査からー 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵 三好郡教育研究所 研究員 三好中学校 新居 信子

集	年 度 (平成)	内 容
42	13	「生きる力」を育む幼稚園教育のあり方 ー幼児が自ら生活していくための教師の役割ー 白地幼稚園 教諭 木徳 友子 「ふるさとを愛し、共に学びあう心豊かな児童の育成」 ーへき地の特性を生かした様々な体験活動をとおしてー 東山小学校 教諭 高篠 佳子 生きる力を養う生徒の育成 山城中学校 教諭 白井 正道 T T授業や少人数授業を実施した徳島県の連絡協議会資料 (平成12年度・13年度)から中学校数学におけるT T授業について考察する 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 自ら学び、豊かな心を育てる学校図書館についての研究 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 木藤 和恵
43	14	豊かな感性をはぐくむ教育の創造 ー金子みすゞの心を活かした詩の指導をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 西井川小学校 小角 昌美 数学で基礎基本の力をつける方法をさがして 三好郡教育研究所 研究員 池田中学校 上田 美恵 地域における教育ネットワークの活用とコーディネータの役割 ー学校インターネット指定から始まった三好郡の教育ネットワークー 三好郡ネットワークセンター I C T コーディネータ 中川 斉史 生藤 元
44	15	生きる力をはぐくむ幼稚園教育のあり方 ー身近なものに興味を持ち、活動を豊かにするためには、教師はどのようにかわればよいかー 吾橋幼稚園 教諭 山口 里子 「生きる力」を育む総合的な学習 ーふるさとを愛し、人や自然と積極的にかわろうとする児童の育成をめざしてー 出合小学校 教諭 岡 佳子 「ふるさとを愛し、豊かな感性を持ち、自らの力で未来を創造しようとする子どもの育成」 西祖谷中学校 教諭 富永 浩史 「生きる力」をはぐくむ美術教育美術の基礎基本の力を身につけ、個性を生かす指導について ー人として心豊かに生きていくことのできる力を育てるためにー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 生きる力をはぐくむ教育の探求 ー「本との出会い」をとおしてー 三好郡教育研究所 研究員 小角 昌美
45	16	ふるさとの歴史や自然、文化にふれる活動を通して、自ら学び心豊かに生きる子どもの育成 下名小学校 教諭 高岡 和恵 『地域から学ぶ「生きる力」の育成』 池田中学校 「みる力」を育てる美術教育 ー美術の基礎・基本をみつめてー 三好郡教育研究所 研究員 田口美千代 学校の情報化をどのように進めるか 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元

集	年 度 (平成)	内 容
46	17	幼稚園において、幼児と人やものとのかかわりが重要であることを踏まえ、 幼児の主体的な活動を確保するための物的・空間的環境をどのように構成していくか 第1ブロック三野町・三加茂町幼稚園研究グループ 地域や学校の特性を生かし、一人ひとりの『生きる力』を伸ばす生活科・総合的な学習の時間 絵堂小学校 教諭 鶴田 美枝 地域や人に関わる体験的な活動を通して、自ら考える生徒の育成 三好中学校 教諭 野田 圭祐 三好郡小学校における情報教育の現状について 三好郡教育研究所 研究員 生藤 元 文字式の指導に関する研究 ー1年文字式における生徒の理解の仕方についてー 三好郡教育研究所 研究員 上田 美恵
47	18	子どもの豊かな言語感覚を養う指導 ー主体的により良く伝え合う力の育成をめざしてー 西井川小学校 教諭 丸本 豊美 地域に学ぶ総合的な学習の時間 ー共に生きる町づくりについて考えようー 三加茂中学校 教諭 玉木 利典 三好郡・市の小学校における情報教育の現状 三好教育研究所 研究員 生藤 元
48	19	「健全な心身の成長をめざして」ー高齢者や保護者とのふれあいや連携を図りながらー 第2ブロック三野町・井川町幼稚園研究グループ 「栄養教諭を中核とした学校・家庭・地域の連携による食育推進事業」 自らの食生活に関心を持ち、すすんで健康づくりに取り組む子どもの育成 ー学校・家庭・地域の連携した取り組みー 池田小学校 栄養教諭 大西 欣美 「確かな学力」を身につけさせるために ープレゼンテーション能力の育成とICT機器の利用ー 三野中学校 教諭 中川 悌二 「グラフを書くのは何のため？」ー何でもかんでも「%」からの脱却で、知的な分析をー 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 「学校現場の生活を便利に工夫し能率化を図ろう」 ー子どもたちに「創意工夫」の精神が大切なことを伝えようー 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「中学校理科におけるICT機器の活用」 ー評価活動におけるマークシートの利用ー 三好教育研究所 研究員 山田 泰弘
49	20	ふるさとを愛し、ふるさとを元気にする心豊かな子どもを育てる 檮生小学校 教諭 谷川 智彦 小規模校の良さを生かした修学旅行の実践 ー『バスガイドさん・運転手さん・添乗員さんとのふれあい』を中心としてー 東祖谷中学校 教諭 高崎 英和 授業カイゼンとICT活用 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 体育科における効果的なICT機器の活用について 三好教育研究所 研究員 西井 昌彦 「小学校情報テキスト」の利用状況について 三好教育研究所 研究員 中川 斉史 学級づくりにおける分析と対応の一考察 ー構成的グループエンカウンターを考え方を生かしてー 三好教育研究所 研究員 石丸 秀樹

集	年 度 (平成)	内 容
50	21	幼稚園での確かな学び・小学校での確かな学力をめざして 一人やものとかかわりを深め、豊かな感性や思考力の芽生えを育てる－ 山城幼稚園 教諭 山中あけみ 池田幼稚園 教諭 大久保珠美 新しい学力観をふまえた学びの創造 －習得型学力から活用型学力へのステップ－ 足代小学校 教諭 熊井 美樹 ボランティア活動を通じて生徒の自主性を育てる 井川中学校 教諭 村上 郁代 小学校外国語活動の現状と今後の在り方 －小・中における英語教育の連携を目指して－ 三好教育研究所 研究員 藤本 恒幸 授業におけるＩＣＴ活用の促進についての課題 三好教育研究所 研究員 福田 ミカ
51	22	「人間力」を育てる総合的な学習の時間・生活科の創造 －人・地域との関わりの中で育つ豊かな学びの追求－ 芝生小学校 教諭 小原 敏二 「ふるさとを愛する心」を育てる 山城中学校 教諭 内田 清文 実物投影機の活用目的の明確化 －実物投影機利用意図の可視化を通して－ 加茂小学校 教諭 福田 ミカ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知の実態 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 三好郡市小・中学校における情報モラル教育の現状と課題 －三好郡市小・中学校学級担任アンケート調査と研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
52	23	豊かな感性や思考力の芽生えを培う保育内容の創造 －小学校との連携の中で育つ「学びの芽生え」－ 大野幼稚園 教諭 谷本 紀子 地域から学び、ふるさとを愛する心豊かでたくましい子どもの育成 －学びを生かし、自らを表現できる佐野っ子をめざして－ 佐野小学校 教諭 山田 知弘 人や地域とつながり、協働できる生徒の育成 －「コミュニケーション能力の育成に資する芸術表現体験事業」をとおして－ 西祖谷中学校 教諭 西岡ひとみ 三好市・三好郡の中学生の都道府県認知のイメージ 三好教育研究所 研究員 山西 敏広 平成２３年度三好郡市小・中学校学級担任の情報モラル教育 －グループウェアによるアンケート調査と低・中・高学年研究授業より－ 三好教育研究所 研究員 山口 恭史
53	24	家庭や地域、中学校との連携を密にした特色ある学校づくり －小学校の統合と小中連携教育の中で育つ学び－ 東祖谷小学校 教諭 森永 直美 人・社会・自然とのつながりの中で人間性を育む教育活動 －ＥＳＤ（持続発展教育）の視点を取り入れて－ 池田中学校 教諭 丸岡 美枝 三好郡・市小中学校における情報モラル教育 －学級担任アンケート調査と研究授業より－ 昼間小学校 教諭 山口 恭史 「小学校外国語活動についてのアンケート」から見えてくること 三好教育研究所 研究員 山下 達也 三好市・三好郡の小・中学校におけるＩＣＴ活用状況について 三好教育研究所 研究員 岡本 博一

集	年 度 (平成)	内 容
54	25	豊かな心をはぐくむ幼稚園教育 ー様々な体験活動を通じて、 地域の人々や同年齢、異年齢の子どもたちとふれあう交流活動の実践研究ー 昼間幼稚園 教諭 佐藤 重美 地域とともにある学校をめざして ー地域の教育力を生かして育てる三庄っ子ー 三庄小学校 教諭 三好美智代 生徒一人ひとりの思いが尊重され、つながりを大切にする活動を通して 三好中学校 教諭 近藤 剛 複式学級における指導の充実を目指して 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 I C T活用の推進と情報モラル教育 三好教育研究所 研究員 岡本 博一
55	26	家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践 ～多くの人々とふれ合う体験的な活動や学校行事を通して 家庭や地域と手を取り合って心豊かな子どもをはぐくむ教育活動の実践～ 井内小学校 教頭 住田 克弘 豊かな心と、自ら学ぶ力を育てる中学校教育の創造 ～学校図書館を中心として～ 三加茂中学校 教諭 山下ちづる 小中連携教育～東祖谷小中学校の取り組み 三好教育研究所 研究員 岡本 博一 複式学級におけるパソコンを活用した算数科の授業 三好教育研究所 研究員 赤堀 誠司 社会科における思考力・判断力・表現力を育てる授業の工夫 ～討論活動を取り入れた授業づくり 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
56	27	自分で気づき、考え、実行し、仲間とともに未来を生きぬく心豊かな子どもの育成 ～地域との交流を通してふるさとの魅力再発見～ 箸蔵小学校 教諭 藤原 隆司 出会いをつなぎ、自己を見つめ、自他の人権を尊重する生き方を求めて ～識字学級との交流を通して～ 三野中学校 教諭 尾形 君代 「読む知る感じる」読書環境をめざして ～学校図書館教育の実践と課題～ 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 児童・生徒の生活環境の改善を目指して ～ネット端末（スマホ等）の使用時間を見直して～ 三好教育研究所 研究員 井川 秀樹
57	28	地域から学び、郷土を愛し、主体的にたくましく生きる児童の育成 ～様々な人とかかわりや体験活動を通して～ 山城小学校 教諭 井上 清隆 「生きる力」を育む土曜授業実践の成果と課題 三好教育研究所 研究員 加藤 公夫 関わりの中で主体的に学び豊かな感性を育む鑑賞教育 ～見て、考えて、表して、意見を交わす～ 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美

集	年 度 (平成)	内 容
58	29	変化する社会の中で，心豊かにたくましく生き抜く日本人の育成 ～身近な自然や人とのかかわりをとおして しなやかな心と体をはぐくむ保育の工夫～ 西井川幼稚園 教諭 元木 真砂代 豊かな心を持ち，未来に向かって主体的に行動する子どもの育成 ～一人一人のちがいを認め，助け合う仲間づくりを通して～ 王地小学校 教諭 濱口 ミエ 社会科デジタル教材の開発と活用 ～ＩＣＴの有効な活用をめざして～ 三好教育研究所 研究員 常村 淳 生徒の意欲関心を高め，豊かな感性や思考力を育成する主体的な学びについて ～美術科における提示型デジタル教材の作成と活用を通して～ 三好教育研究所 研究員 宮成万寿美
59	30	自らの命を守り抜くために主体的に行動する態度の育成 ～実践的な安全教育の取り組みを通して～ 昼間小学校 教諭 久原 有里 生徒の意欲関心を高め，豊かな感性を育成する主体的な学びについて ～美術科におけるデジタル教材の作成と活用を通して～ 三好教育研究所教育研究所 研究員 宮成 万寿美（現三野中学校） 興味関心を高め，基礎学力向上に役立つデジタル教材の開発と活用 三好教育研究所 研究員 常村 淳 誰もが分かる，楽しい授業を目指して ～ＩＣＴの活用とＵＤを取り入れた授業の工夫～ 三好教育研究所 研究員 立花 志津